
夏の薫り

剣一

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の薫り

【Nコード】

N2554B

【作者名】

剣一

【あらすじ】

始まりは高校二年の夏……僕はある女の人と出会った。この時から僕は少しずつ変わっていったのかもしれない。良いか悪いかは分からない。けど一つだけ分かる事がある。あの時、もし彼女と出会っていなかったら今の僕はいない。ある少年の青春と少し甘い片思いのお話

プロローグ（前書き）

こんばんは

再び編集しました

初めて読んでいただく方も、再び読んでいただく方も楽しめる作品にしたいと思います

未熟者ながら一生懸命書いていくので、作品、登場人物、そして作者共々宜しく願います

プロローグ

僕の名前は八城^{ヤシロ}隼人^{ハヤト}。十七歳の高校二年生。勉強は可もなく付加もなくと言った所だ。

これと言って自慢出来る物がない僕の自己紹介はこのくらいにしておこうと思う。

八月末、まだ夏休みの僕は学校にいた。学校で行ってくれる夏期講習に出席していたからだ。

茹だるような暑さの中、涼しい顔を一人だけしている教師。周りの生徒はみんな暑さで疲れきった顔付きをしていた。

「よし、今日はここまでだ。」

教師がそう言って、チョークを片付けた。僕はその書かれた文字を写す。僕が書き終わるとほぼ同時に鳴り響いたチャイムが授業終了を告げた。

起立、と言う教師の言葉に反応し、生徒全員がすぐに立ち上がり、形ばかりの礼をして今日の講習は終了した。

荷物を準備し、教室を出た僕に後ろから声が掛けられた。

「隼人、帰ろうか。」

暑さを感じないのかと思うほど爽やかな声の持ち主は御堂^{ミドウ}海^{カイ}。

僕といつも一緒にいる親友と言える存在だ。勉強はとても優秀な上、整った顔立ち、ほとんどの人には優しくする性格。本当に非の打ち所がない友人である。

「今日も疲れたよ……」

「いい加減うちの高校も教室にクーラー取り付けろべきだよ。」

「だよ。」

あの暑さはやってらんないよ。」

くだらない話をしていた僕達の前に見慣れた少女が現れた。

「隼人も海もおっそーい!!!」

この少女は時田^{トキタ}春華^{ハルカ}

僕と海と同じ中学校出身で、何だかんだでクラスがずっと一緒な昔からの腐れ円だ。

口は悪いし、ちょっと尖った性格の持ち主だが、心の底は優しく、本当に困った時にはそつと手伝ってくれる。

「ごめん、ごめん。」

「ごめんね、春華」

この曖昧な謝罪に腹をたてたのか、更に文句を言おうとするが、それを海がそつと制す。

「早く帰るんでしょ？」

僕達は上履きを履き替え、最寄り駅へと向かった。

教師の事、暑さの事、これからの事。僕達の話が尽きる事はなかった。もちろん最寄り駅につき、電車に乗ってもだ。

ブシュー

気の抜けるような音がして電車の扉が開く。

「ふー本当にあつついわねー」

「冷房ばんざーい。」

春華と海がそう言いながら乗り込む。僕もそれに続く。

夏休みは学生の特権であつて、車内はガラガラだった。そんな殆ど乗客がいない車内の冷えた空気はすぐに僕の汗を奪っていった。

僕達の家は学校まで自転車でも行こう思えば可能な距離にある。だから電車に長時間乗っている訳ではない。僕は二人より一駅先に到着する。

「じゃあね。」

車内の二人へ軽く手を振り、僕は改札へ続く階段を上り始めた。

車外に出ると、僕は再びあの暑さに襲われた。引いていった汗もすぐさま吹き出し始める。

帰るか、と僕は階段へと向かった。

僕が使う階段にはエスカレーターは設置されていないので、階段をYシャツの中にパタパタと風を入れながら上がって行く。

階段を上がりきり、数歩進んだ時に後ろから小さな叫び声と、ドン

ツと言っ音がした。

後ろを振り向くと、そこには大きな鞆と、一人の女性が

「いったー…」と体を起こす姿が目に入った。

それが忘れたくても忘れる事など出来なくなる人との初めての出会いになるとは、その時は微塵も思っていなかった。

プロローグ（後書き）

初めて読んでいただいた方にはありがとうございます
これから宜しく願います

再び読んでいただいた方にはわざわざありがとうございます
これからも宜しく願います

何度も編集する言い訳をすると、この作品は自分の処女作です
なのでまだ自分の文章の型が回数を、月日を重ねていく毎に少しづ
つ変わっていつてしまっていました

だから、今回自分の文章の型が見えてきたため、再編集という形を
取らせていただきました

より丁寧に、自分が書ける一番の文章で仕上げました
少しずつ、少しずつ全ての作品を”今”の自分の文章に編集し、物
語を統一したいと思っています

投稿ペースが早い訳ではないので、長いお付き合いになるかもしれ
ませんが、宜しく願います

第1話（前書き）

改めて投稿します

再編集したこの作品、よろしければ読んでいって下さい

第1話

起き上がる女性の顔が僕の視界に入った。

その女性はとても綺麗な人だった。

それぞれが自己主張していない整った顔、何物にも染まっていないくらい真っ白な肌。そして、肌とは対処的に夜空のような黒髪。

僕は何も考えずに動いていた。

「大丈夫ですか？」

声をかけながら、落ちた鞆を拾い上げる。

「あつ！？

は、はい、ありがとうございます。」

恥ずかしさからか、その女性の頬に紅が差した。

「ど、どうぞ。」

僕は少し吃りながらも、女性が立ち上がるのを待つてから鞆を渡した。それから僕は何事もなかったかのように改札へと向かった。

正直、何か期待していたと言ったら嘘ではない。しかし、あんな事で何かが起こる程現実が甘くはない。

もつと話し掛けたりすれば良いのかもしれないが、僕はこれ以上行動を起こせる程の勇氣は全くとって、持ち合わせていなかった。鞆を渡した時に微かに触れた手の温もり、微かな残り香。僕はそれだけでも十二分に喜びを感じる事が出来た。

「あぢい……」

汗を落としながら、家へと向かう。駅から家まで歩いて約5分かかる。

舗装された道はとても歩きやすい。しかし、逃げ道を失った熱はその場を靄のように漂い続けていた。

Yシャツがびしょびしょになる頃、僕は家に到着した。鍵を取り出し、ドアを開ける。

「ただいま」

僕に言葉が返ってくる事はない。両親が共働きの僕の家ではいつもの事である。

寂しくないと言えは嘘になるだろう。しかし、僕はもうそんな日常に慣れた。何年もこんな生活を続けていれば嫌でも慣れてくる。だからと言って両親を嫌っている訳ではない。確かにいつも口うるさいし、鬱陶しい時もしょっちゅうある。しかし、その時の嫌いという感情は僕の本当の感情ではないという事くらいは簡単に理解出来る。

部屋に行かずに、リビングで制服のYシャツを脱ぎ、脱衣所にある洗濯機に入れに行く。

両親がほとんどいないので家事は全部と言って良いほど僕がやっている。料理もかなりできるようになった。

僕は洗う予定だった他の衣服を洗濯機に入れ、スイッチを押した。

部屋に戻り、そのまま軽く部屋の片付けをした。

「よし…」

それが終わると僕は家用のラフな格好に着替え、そして昼御飯を食べるためにキッチンに行った。

「この棚に入れたんだけどな」

数日前にまとめ買いしたカップラーメンを探す。カップラーメンは入れたはずの棚で見付ける事は出来なかった。

ふと嫌な予感がした僕はゴミ箱を開けてみる。そこには僕の予想した通り、空の容器が他のゴミと共に入っていた。

「最後の一個だったのに…食われたあ…」

多分親が食べてしまったのだろう。

買いに行くのも面倒くさい。僕は冷蔵庫を開けて、簡単に何か作れないか考える。しかし、そこには晩御飯のために買っておいた食材しか無く、何かを作ろうとする事はほぼ不可能だった。

結局僕にはコンビニに行くしか昼御飯を取る方法はなかった。

ガチャ

鍵を閉める。

玄関の外では暑さが僕を待ち構えていた。

ただまだ喜ばしい事にコンビニは家の近くにある。だらだら歩いていてもすぐにコンビニに到着した。

自動ドアの向こうはガンガンにクーラーが効いていた。出始めていた汗がすぐに引いていくのが分かった。

僕は商品を見て回り、結局既に作られている冷やし中華を手にとった。会計を済ませ、再び真夏の太陽が降り注ぐ道路に出ようとした。その時、僕は先程の女性とすれ違った。

制服から着替えたからか、その女性は振り向いた僕には全く気づかぬ様子で店内に入って行った。

「……」

僕はゆっくりと歩き出した。

帰宅後、冷蔵庫から冷え切った麦茶を取り出し、コップに注いでから一気に飲み干す。

改めて考えてみると、あの女性はあまり大きくない駅の同じ改札へ続く階段にいたのだ。この辺りで見掛けても不思議ではない。

僕は空になったコップに再び麦茶を並々と注いだ。

「さあ食べるかー」

袋から取り出し、蓋を開ける。具を麺の上に乗せ、つゆをかける。

「いただきます。」

麺を啜りながら僕はまた会ってみたいと考えていた。会ったとしても別に話し掛けたりする訳ではないから正確には見掛けたい、と言った所か。僕はそんな淡い期待が叶うなんて微塵も思っていなかった。

食べ終わったゴミを捨て、僕は自分の部屋へと向かった。

部屋は夏の暑さで満たされていた。

第1話（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

この物語を執筆するにあたって、どのような流れが合ったのか軽く書いてみます

この話を最初に考え始めたのは2006年の秋の終わりくらいですね
それまでは自分自身で執筆するなどは考えていなくて、ただ周りの作品を読んでいくだけでした

ただ、色々な作品を読んでいくうちに自分でも書いてみたいという
気持ちが少しずつ高まっていき、手探り状態で書き始めました

大まかなストーリーは本当にパツと浮かび、その時には最終話の形
も出来ていました

そこに肉付けをしていったんです

ある程度進んでいくと、最初の方の話の文章が気に入らなくなり、
編集

それを少しずつ繰り返しながら進めていきました

そんな感じですかね

これ以後の話も満足のいく編集をしていくので、自分自身の中でし
っかりと完成した『夏の薫り』をお楽しみいただけると、本当に嬉
しいです

これから、宜しく願います

第2話（前書き）

二話を編集したので再投稿します

宜しければ読んでいって下さい
よろしく願います

第2話

彼女を見かけたあの日から数日後の日曜日、僕はいつものように家にいた。

両親は久しぶりの休みが取れたみたいで、まだ部屋で寝ている。

僕は適当な時間に起きると、キッチンでパンをトースターにいれ、ベーコンと卵を焼いていた。

ピンポン

玄関のチャイムが急に鳴った。僕は火を止めると、小走りで玄関へと向かった。

「はい」

「あつ隼人ちゃんかな？隣の島崎です。おはようございます。」

聞き慣れた声の持ち主は隣の家のおばさんの「島崎 知子^{シマザキチコ}」さんだ。昔から家を留守にする事が多い両親の変わりに何かと僕の面倒を今までたくさん見てくれていたとても親切で我が家とも仲がよいおばさんである。

「あつ島崎さんおはようございます。どうしたんですか？」と答えながら僕は玄関を開けた。

ドアを開け、僕の目に飛び込んできたのは見慣れたおばさんの顔。

そして

あの人の笑顔だった……

「あ…お、おはようございます。」

ただ驚きながら挨拶をする僕におばさんはさらに僕を驚かした。

「この間ね、うちに引越してきた親戚の「夏風 薫」さんよ。まあ私が言うより、後は自分でね。じゃあ私は家に戻るわね。隼人ちゃんおばさんちいつでもご飯あるから来てね」

そんな事を言い、おばさんはさっさと自分の家に帰って行ってしまった。

僕と彼女の目がゆつくりと合った。

彼女は僕に向かって一度ニコリと微笑むと、良く通るとても綺麗な声でしゃべり始めた。

「おはようございます。先日隣の島崎さん宅に引越してきた夏風 薫です。今は仕事の都合で島崎さん宅の部屋を借りています。八城君よろしくお願いします。」

彼女が自己紹介をしているが、僕は驚きでいっぱいである。

「あー」とか

「はい」とか曖昧な相槌をしていると

「え」と、この間の駅の時、手伝ってくれたの八城君よね？」

「あ、は、はい」

とか慌てて返事をする、彼女は恥ずかしそうに微笑んだ。

「何かもう…恥ずかしいとこ見せちゃったなあ…でもあの時はありがとね。」

「いえいえ、気にしないで下さい。あ…あ、えと自分はや、八城隼人です。これからよろしくお願いします。」

とりあえず僕は彼女に向かってしっかりと自己紹介をした。

「本当によろしくね。あと、隼人君が1人で家にいる事多いっておばさんに聞いたから、困った事あったらいつでも言ってね。私がご飯でも作ってあげるから。可能だったらね。」

「あー本当にありがとうございます。」

毎日食べたいなあとか思いながら、お礼を言っと、彼女は

「両親によろしくって言っというてもらっていいかな?。」

彼女は再びニコリと笑った。

「じゃあ、また何かあったらよろしくね。」

と言って彼女はおばさんちに帰って行った。

とても緊張して、冷や汗までかいていた僕はリビングに戻り、冷えたベーコンと卵を温めてパンに乗せて食べ始めた。

「薫さんかぁ・・・いいなぁ・・・」

にやついてる僕に珍しく早く起きた母が急に話しかけてきた。

「何隼人にやついてるのよ。不気味ねえ。で、今の人誰だったの？」いきなり話しかけられ、焦る僕は少しもってしまった。

「な、なんだよ、母さん。何か隣の島崎おばさんの家に親戚の人が引っ越してきたんだって。」

「あらそうなの？なら後で挨拶に行ってくるわ。」

といい、部屋に戻っていった。

そして僕も部屋に戻り、海と遊びに行くための準備をしまった。

僕の一目惚れから始まった恋

名前も知らなかった彼女と再び出会った

僕に...

僕の心に...

夏の風が吹き、薫りたたせた

第2話（後書き）

今回も最後まで読んでいただき本当にありがとうございます

次話もまたそのうち編集して、再投稿する予定なので、その時はよろしくお願いします

第3話（前書き）

更新が遅くなってすいません。
つーか全然うまくありませんね・・・

第3話

薫さんが隣の家につ越して来てから数日の間特に何もなかった。
(やつぱり何もない隣人かなあ)

そんな事を考えながら、部屋のベッドでうとうとしていたら、呼び鈴が鳴った。

ボーっとしたままドアを開けると、そこには薫さんがいた。

「あれ？起こしちゃったかな？」

薫さんに会った瞬間から眠気なんて物は消えている。

「いやいや大丈夫です。今日はどうしたんですか？」

「あのね今日暇ってお母さんから聞いているんだけど……今日大丈夫？」

「はい！？だ、大丈夫です。でも、ちょっと待ってもらえますか？」

「ごめんね、急に……用意できたら家に来てね。待ってるから。」

と言って薫さんはおばさん家に戻って行った。

この間挨拶に行った母さんが何か言ったのだろう。

何の用事かワクワクしながら、僕は部屋に戻り、着替えを始めた。学校に遅刻しそうな時でもここまで早く着替えたことはないかもしれない。そして身だしなみを整えおばさん家に行った。

ベルを鳴らすとすぐに薫さんが出てきた。

「ごめんね、急に。今日はこの街を少し案内してもらえないかな？」

「全然大丈夫です。えと……じゃあ何見たいですか？」

「スーパーとか商店街とかそうゆう所を覚えときたいんだよね。いい？」

「はい、じゃあ行きましょうか。」

僕はこう言つと、ゆっくり歩き始めた。

歩きながらこの近くで生活するのに知つていたほうがいい場所を考え、色々紹介していった。薫さんは気さくに話しかけてくれたので、すぐに時間は過ぎていった。ふと時計を見ると短い針は1

2の近くを指していた。

「今日はほんとに急にありがとうね。もうお昼だしご飯一緒に食べない？」

薫さんはこう言ってきた。

（断るはありますか）

「はい。もちろんです。」

僕は即答した。

「フフ……じゃあどこにする？」

「ど、どこでもいいですつ。」

「うーん、じゃあここら辺で美味しいところがいいな。」

そこで僕は考えたが、思い浮かんでくるのは近場の海や春華達と行くファミレスやお好み焼きなど薫さんと行けるわけがない所しか出てこない。

「すいません、まともな所が一個も出てきません……」

「そっかーいつも友達とかとどこ行くの？」

「ファミレスとかお好み焼き屋とかです。」

「あっならお好み焼き屋さん行きたーい。」

「そうですね？なら美味しい所行きましょーうよ。」

僕はいつも行くお好み焼き屋に向かった。

お店に着き、店内に入ると店のおばさんがこんなことを言ってきた。

「あれ？隼ちゃんにも彼女できたんかい？ずいぶんべっぴんさんじゃないかい。イヒヒヒヒ。」

「ち、ちがうよ、おばさん！！」

「はい、はいそんな必死に否定しなくても分かってるよ。」

「う……」

おばさんにからかわれてる僕を笑いながら、奥からおじさんが話しかけてきた。

「その美人さんとはどんな関係なんだい？」

「あ、えっと私は先日隼人君の隣の家に引っ越してきた夏風薫と言います。今日は隼人君におこの辺の案内をしてもらおうと思いまし

て。」

「そうかいそうかい。じゃあこの馬鹿の面倒を見てやってくれよ。」

「ちよっとおじさん!!」

「ヒヒヒ、確かに。」

「ふふ。分かりました。」

「薫さんまでっ」

「で、いつものでいいんかい？」

「ああ、うん。」

「薫さんは？」

「あ……えとじゃあ隼人君のと同じのを願います。」

少ししてから頼んだ物がきた。同じものを注文したはずなんだがな

……

「隼ちゃんと薫さんの同じにするわけないでしょ!!ほら、隼ちゃんは自分で焼けてしょ。あ、薫さんのはあたしが焼いてあげるからね。」

それからみんなで笑いながら、食べた。(この間お客さんは入ってきてない。)

結構な時間いたので、そろそろ出ることにした。

「ごちそうさまー。おばさん、お金。」

「あいよ。あ、薫さんはいいよ。」

「え?いや、悪いですよ。」

「良いの良いの。あたしが言っただから。ちよっと隼ちゃんは出てきな。」

「え?あ、はい。ご馳走様でした」

僕は先に外に出た。少ししてから、薫さんが出てきた。結局おばさん達が勝って、薫さんはお代を払わなかったそうだ。その代わりになんか取引をしたらしい。

「その取引って何ですか？」

「内緒っ」

こう薫さんは言いながら、舌をちろっとだした。

この時、薫さんがおばさん達とお代の代わりにした取引はめったに家に帰らない親の代わりにずっと一人の僕の世話を少しでもやってほしいと言われたたらしい。

その時の僕はそんな事が分かるほど賢くなかった。

第3話（後書き）

今回もほんとありがとうございました。
次回ができる限り早く投稿できるように頑張ります。

第4話（前書き）

ふうゝまだまだ難しいですね……
もし良ければ読んで下さい。

第4話

近所の案内を終えてから数日後、僕は終わらない課題と春華と海の家に行った。(カイの家であって、ウミの家ではない) ちなみに海には父親がいない。海が小学校の時に出てったらしい。話が話だけに海の親友と自負している僕もこの話については深く知らない。きっと海が話すべき事だと思ったら自分から話してくれるだろう。

話を戻すが、この勉強会の提案者は海だ。毎年毎年休みの前日位に泣きついてくる僕のために計画してくれたらしい。

「計画的にやらないからそうなるんですよ。もう少し計画的にできないの？毎年毎年少しは学習しなさいよ。」

「そー言う春華だつて終わつてないじゃん。」

「あたしは後少しじゃない。」

「はいはい、そこまでそこまで。隼人は写す、春華は考える。そうしないと終わらないよ?」

本当に海はすごい。海がいるからうまくこの3人が機能してる気がする。海がいなかったら、多分僕と春華はずっとけんかをしているだろう。

「わ、分かつてるわよ。」

それから皆黙々とやる事を順調に消化し、時間は昼過ぎになっていた。

「お昼どうする?」海がつぶやく。

「隼人に作らせたら?」春華が適当に答える。

「え!?!」

「それ良いね。俺の宿題写さしてるんだから、作ってもらおう。」

「う……」それを言われると拒否ができないじゃないか。

「分かった、作るよ。何がいい?海ー台所借りるよ。」

「あー冷蔵庫の中の適当に使っていいよ。」

「パスタがいいー」

春華には断じて聞いてないんだがな……

「麺がないから無理。」

「じゃあ買ってくればいいじゃない。」

こいつは何様のつもりだ。

「じゃあ行つて来るよ。春華待つて。」

「え！？2人共行くの？ならあたしも行く。」

結局皆で近所のスーパーに行くことにした。冷蔵庫の材料だけじゃ足りないので、色々と買う。ちなみに代金は皆で割り勘だった。それから海の家に戻り、作り始めたから、結局完成したのは3時ごろになってしまった。

「おそーい。」

「なら春華も手伝えれば良いだろ。」

とりあえずテーブルに運ぶ。

「おつつまそ。やっぱぼぼ一人暮らしの隼人は上手だな。」

「味は分からないけどね。」

「いいから、食べようよ。頂きます。」

それから食べ始めた。よくよく考えると、ずっとこいつらといたけど、ちゃんとした料理を作つてあげたことはなかった気がする。

結局3人分の片付けなども終わると、夕方になっていた。

それからまた少し写し始めた。ある程度写し終わると

「じゃあ隼人がそれ写したら終わりにしようか？」と海が言った。

「そうだね。」

ちなみに今日海のを写しまくったから、宿題は残りが半分くらいまで減った。本当に海には感謝しても、しきれないくらいだ。

「おしつ終わった。本当にありがとう。」「良いよ、良いよ。昼も作ってもらったし。」

「じゃあ帰りましょつ。」それから僕と春華は帰宅準備をして帰った。2人で帰りながら、まだ少し残っている夏休みの計画を海の予定も考えずに勝手に決め、駅前で別れた。

そこで携帯の電源を入れると、薫さんからメールが来ていた。この

間メアドは交換していたのだが、なかなか送る勇気などがなくて、あまりやり取りをしていなかった。

あわてて内容を確認すると、

「薫です。えつと今日の晩御飯、隼人君1人でしょ？なら家で一緒に食べない？」そんなメールが着ていた。

「今日も母さんも父さんもいませんけど、良いんですか？」と返信した。

やつと来た電車に乗り、発車を待っていると、携帯が揺れた。

「大丈夫！！（ハ・ハ・ハ）／ちゃんと知子さんにも許可取ったから」そこまでしてくれてるなら、僕には断る理由が1つもない。

「なら、遠慮なく晩御飯食べさせてもらいます。何か買ってくもんありますか？」このメールを送ると、電車が発した。

再び携帯が揺れた。

そこには

「遠慮しないでいっぱい食べてね。（・・ハ・ハ）bてゆうか隼人君何だかサラリーマンみたいな事言うね。まあ買ってくる物は特にないよ。じゃあ気をつけて帰って来てね」とあった。

そんなにおっさんくさいかなと考えていると、あつと言う間に駅に着いていた。

僕は知らず知らずの内にいつもより早歩きをしていたと思う。

薫さんの料理を考えながら歩くと、いつの間にか家の目の前にいた。いつもならここで家に入るが、今日は違う。もう少し進み、叔母さんの家のドアの前まで行き、チャイムを鳴らした。

「はい」と言う声と共にドアを開けてくれたのは、叔母さんではなくエプロンを付けた薫さんだった。

「こ、こんにちは。」焦る僕。

「はい、上がって上がってご飯冷めちゃうでしょ？早く早くっ。」妙にテンションの高い薫さん。

「おじゃまします。」とかを上の方で言いながら、上がりリビングに向かう。

そこで僕を迎えていたのはとても美味しそうな料理だった。

久しぶりに見た、暖かい食卓に僕は1人で感激していた。

この時の会話は取り留めのないくだらない会話だった。だけど僕はしっかりと覚えている。

なぜなら、共に話し、笑いながら食べられるという暖かい食事を1日2回も経験したからである。

第4話（後書き）

今回も最後まで読んでもらってほんとありがとうございました。
良ければ評価をしてって下さい。（別に厳しくてもいいんで…

第5話（前書き）

まだまだ未熟なので、分かりにくい表現や間違っ
てしまってる表現があるかもしれません…
もし見つけたら、こっそり教えるか、見て見ぬふりし
といて下さい。

第5話

今年の夏休みは色々あった。薫さんが来た事により、良い方へと変わっただろう。

けど、僕も高二だ。大学進学を希望している身なので夏休み前から塾には通い始めていた。

そしてその塾の授業は前半にもあったのだが、後半は前半以上の日数が用意されていた。

そんな塾での授業を半分以上は消化し、夏休みの授業終了までちょうど2週間分、夏休み終了まで2週間と数日となった日僕はいつものごとく動く気のしない体を無理矢理動かし、授業に行こうとして家を出ると。そこで僕は薫さんを見つけた。

「あつ、薫さんこんにちは。」

僕が話しかけると薫さんは気づき、ドアの鍵を閉め、近づいてきた。

「おっ隼人君こんにちは。駅の方？」

「はい、塾に…」

「おっ！？感心感心。」と薫さんは笑いながら言った。

「塾って何時くらいに帰って来るの？」急に薫さんはそんな質問をしてきた。

「10時ちよい過ぎには帰って来ますね。」

「じゃあそれから晩御飯？」

僕は少し考えこう答えた。

「ま、まあそれから作ったり、コンビニの買ってきたり色々ですぬ。」

（正直言うと塾のある日は面倒くさいから自分で作らないから、ほとんどコンビニやカップラーメンであつたし、食べないという日も少なからずあつたのだが、言うとき薫さんが心配すると思った僕は嘘をついた。）

「そっかぁ～大変だね…」そんな事を言いながら考えていたような

薫さんは急にこんな提案をした。

「なら私がこれから隼人君の塾の日は晩御飯作ってあげようか？」
とてもうれしい事だが、さすがに申し訳ないので、僕は遠慮する。

「いいの、いいの私が勝手にする事なんだから。」

「いや、でも……」

戸惑う僕をよそに薫さんは

「じゃあ私こつちだからちゃんと勉強しなさいよ」と言い、歩いて行った。

僕はそのまま駅に行き、塾に向かった。

睡魔を誘う授業を終え、塾の友達と話しながら駅に向かっている途中に携帯を見ると薫さんからメールが着ていた。

「今塾かな？とりあえず家に着いたら教えてね（＾－＾）／」

内容を確認すると、携帯を閉じ、友達とまた話し始めた。

駅に着くと、各自それぞれに別れた。僕と一緒にいるのは誰もいない。1人ホームに行き、電車を待つ。電車はすぐに来た。

（薫さんの手料理か…何作ってくれるんだろう…）少し期待していると、電車は数駅過ぎていった。

そしてある駅で僕は誰かに呼ばれた。

「隼人。」

春華だった。

「おつ春華じゃん。どしたの？」

「ん！？ちよつと用事でね。隼人は？」

「塾に行ってた。」

春華はニヤニヤしながら

「偉いね、まあ隼人なら当然かあ。」

「うつせーな。」

こんな感じの会話を続けていると、すぐに駅に着いた。

春華とも別れ、改札に向かい、駅から出てった。

夜とはいえ、まだまだ夏。少し歩くと汗が出てくる。けれども最近

は嫌な気がしない。前は歩く事が嫌いだった。時間はかかるし、疲れる。

薫さんは前ゆっくり歩き、空を眺め、風に吹かれる。そんな状況が好きだと言っていた。単純な理由かもしれないが、僕はそれを聞いてから、少しずつ歩くようになった。そして歩く事への楽しさを見つけてきた。

歩くようになった事により、今まで気づかなかった事も色々気づくようになった。

空の綺麗さ、風の気持ちよさ、太陽の温かさなどだ。

僕は熱気が残る夜風を体に受けていた。

気づくと僕は薫さんの家の前にいた。かなりぼーっとしていたようだ。

チャイムを鳴らすと、待っていたかのようにすぐに玄関を開けてくれた。

「いらつしゃーい。さあ入って、入って。もうできてるよ。今日は冷しゃぶだよ。」

「おじゃましてーす。」そう言いながら上がる僕を薫さんはリビングへと案内する。

「うわぁーおいしそうですね。」そこにはレタスの上に茹でられた豚肉、その上には赤ピーマンなどの彩り豊かな野菜が乗っていた。

「じゃあ私はご飯よそってくるから、隼人君は手を洗って来てね。」

僕は手を洗い、テーブルに着くのと、薫さんがご飯を持って来るのはほぼ同時だった。

「この位でいいかな？」

「はい、ありがとうございます。」

「ほら、じゃあ食べて、食べて。」

僕は手を合わせ

「いただきます。」と言った。

薫さんは僕が食べているのを、僕の前の席で座って見ていた。その

顔は僕には少し微笑んでいるように思えた。

食べ終え、食器を片付けようとすると薫さんは立ち上がりながらこう言ってきた。

「ごめんね、私も運ぶよ。」

僕は薫さんを座らせながら

「いいですよ。晩御飯食べさせてもらっただからです。」

そう言うと薫さんも納得したように

「じゃあ今日はお願いしちやおうかな？」

僕は台所に運び、洗い始めた。薫さんは僕に色々と質問を投げかけてきた。そして僕も少し質問をしていた。

僕が洗い物を終え、テーブルに行くと薫さんはこう言ってきた。

「これからも塾あるの？」

「はい……まだ数回残ってます。」

「だったらこれから塾の日は家で晩御飯食べなさい。」

「え！？いや、でも……」

流石に遠慮する僕に薫さんはさらに言ってきた。

「いいの、いいの。お隣さんなんだから遠慮しない、遠慮しない。」

「薫ちゃんもやる気なんだから作って貰えばいいじゃない。家の事は気にしないでいいから。」

いつの間に来たのかおばさんがいた。

「でも……」

まだ戸惑う僕に2人はほぼ同時にこう言ってきた。

「遠慮しないっ」

「はい……」

流れに負けてしまった感はあるが、これから塾のある日は薫さんが晩御飯を作ってくれる事が決まった。

この日から夏期講習の日は薫さんが晩御飯を作ってくれた。帰る度に温かく迎えてくれる、僕の家を薫さんやおばさんが作って

くれたのだ。

第5話（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

もしよかったら評価して下さい（マジデオ願イシマス）

では、次の話も頑張りたいと思います。

第6話（前書き）

今回は次の話へと続けるためなので、あまり長くありません…

サイドストーリーで夏休みの書くところかと思うんですが、書いてほしい話があったら教えて下さい（まだまだ先の予定ですが……

第6話

薫さんと出会った夏休みが終わり、新学期が始まった。夏休みぼけをしている僕達を待っていた行事は文化祭だった。

僕達のクラスは夏休み前から少しずつ準備をしていたし、それに出店するのが「喫茶店」という事から、他に比べれば、少し落ち着いていた。

それでも教室内を改装する係などの生徒は忙しそうに見えた。

なぜ僕がこんなのにびりしてられるかというと、僕は当日の係である。つまり文化祭当日は教室で必死になって、料理を作っている事だろう。係を決める時は薫さんにももちろん出会っているはずがなく、親も来ないので海や春華以外に一緒に回るような特に親しい友人達もいない。だから僕は当日にあまり暇のない厨房係を選択したのだ。

始業式から数日後、僕はまだ薫さんに文化祭の事を言っていなかった。

別に隠している訳ではないが、言うタイミングがなかったのだ。

。変に気負う必要はないと自分に言い聞かせ、メールを送ろうとしていた。しかし僕の携帯の画面は送信先に薫さんの名前しか表示されていない。

携帯を見つめていても、何の案も浮かばないので、とりあえず打ち込み始める。

「こんにちは。今度高校で文化祭をやるんですが、良かったら来ませんか？」

文が出来たので、勢いで送信ボタンを押した。

それから数時間後、家事を色々やっていたら、メールを送っていたのを忘れていたが、携帯の点滅がメールが着ていた事を教えてくれ

た。

送信者はさっきメールを送った薫さんだった。

「文化祭かくなつかし〜（　　）いつやるの？」と画面に表示されていた。

その場で僕は日程を打ち込み送信した。

それから数分後の僕は多分笑顔だったと思う。理由はもちろん薫さんが文化祭に来てくれると言ってくれたからだ。それに薫さんが来ている時間に僕の休み時間がもしかぶつたら、一緒に校内を回ろうとも言ってくれた。

僕が連絡を終え、携帯を置くとはほぼ同時に秋の気配を感じさせる夏の風が部屋を抜けていった。

第6話（後書き）

いよいよ次は文化祭に突入です！！

正直言うと、夏休みの間文化祭の伏線をはっとけばと後悔してます

……

第7話（前書き）

文化祭の前編です。

本当は一話で文化祭を完結する予定だったのですが、長くなってしまい、二話にしました。

良ければ読んで下さい。

第7話

あの連絡からある程度たつと、高校は文化祭当日を迎えていた。

僕達の高校の生徒達は文化祭などの行事物にはかなり力を入れるので、今日はいつもの学校とは全く違う雰囲気になっていた。

準備のため早く集合した僕達のクラスは、当日すべき事も全て終え、後は文化祭が始まるのを今か今かと待っていた。

そして、時間があるので代表が何か話す事になった。

まずはクラスの女子の委員長が話す事になった。「え〜と…上手く言えないけど…と、とりあえず思いっきり楽しみましょう。」

「おおおおおお！！！！」

クラスメートが騒ぎ始める。

その後、クラスの男子の委員長が立ち上がり、話し始めた。

「え〜今日、俺らの文化祭が始まる。もうすぐ勉強とかで忙しくなるけど、とりあえず今は忘れて、今日を楽しもう。今までの苦労を無駄にしないためにも、皆頑張って最高の1日にしよう！！！！」
言い終えると、クラスメートがまた叫び始める。

「おおおおおお！！！！」

もちろん僕も皆と盛り上がった。そんな事をしているうち開始時間になった。開始の放送が流れ始める。

「これより東白高校文化祭を始めます…」それから少し放送が流れていたが、周りがうるさくなり、聞き取る事が出来なかった。

そして、文化祭が始まった。

僕達の喫茶店はなかなか盛況だった。昼前でもたくさんの生徒や一般の人が利用してくれた。

そして、昼御飯の時間帯になると、状況はガラリと変わる。

ウェイトレス係が伝票を置きながら、厨房に向かって言うてくる。厨房はまさに戦場となっていた。

けど、みんな必死に頑張った（もちろん僕も）事により、大きな問題もなくピークは少しずつ過ぎていった。

お客さんもちかなり減ってきていたし、お腹も減ってきたので、そろそろ休憩に入ろうかと思いつながら注文の品をウェイトレス係に渡した時、僕のポケットにある携帯が揺れた。

携帯を確認すると、薫さんからのメールが着ていた。

「私今学校着いたんだけど、まだまだいるから休憩入ったら教えてね（＾＾）／」

かなり良いタイミングだ。

そばにいた委員長に休憩に入りたい事を話しかけると

「今の時間帯ならそんなお客さん来てないし私達で何とかなるから大丈夫。けど忙しくなってきたら隼人君呼ぶね。隼人君が調理してくれた方が美味しいし早いからね。まあでもそれまでは文化祭なんだし楽しんできなさいっ。」

と笑いながら言うてくれた。

「ありがとっ、いいんちよっ。じゃあ連絡よろしくねっ」と言い、教室を出る。

薫さんに休憩に入った事をメールすると、中庭の噴水で待ち合わせするという事になった。

いつもより明らかに多い人をかき分けながら、僕は少し早歩きで中庭に向かっていた。

中庭に出た時、僕の目に薫さんが映った。僕はいつの間にか走りだしていた。

その時、風が吹いた。その風は何故か夏の薫りがした。風が通った後は秋の始まりを感じさせた。

第7話（後書き）

ありがとうございます。

前書きにも書きましたが、最初は一話の予定で作っていたので、後編のは近々投稿できると思います。（むしろ早めに投稿します。

では、次話でも頑張ります。

第8話（前書き）

何だかんだ言って遅くなってしまうた（、・ω・、）

文化祭編これでいちよ完結です

第8話

走りながら近づいていくと、薫さんも気付いて、近づいて来た。

「遅くなつてすいません。」

「いいのいいの。じゃあ行こっか？」

「はい。えと…あんまり長くはられないけど、どこ行きます？」

と聞くと、薫さんは少し考えて

「じゃあお昼食べよっか？隼人君もお昼まだでしょ？」

「はい。それじゃあ行きましょう。」

僕が校舎に歩き出すと、薫さんは僕の後ろを付いてきながら、こっぴつけ足してきた。

「食べるのであれば学食がいいなあ。」

「分かりました。それなら学食にしましょう。」

薫さんの急な提案に少し驚きながら、僕は理由を聞いてみた。

「何で学食なんですか？」

薫さんは僕の横に来て、笑顔でこっぴつ答えた。

「隼人君がいつも食べてるお昼御飯を食べてみたいじゃない。」

（薫さん…その笑顔は反則ですよ…）

2人で学食に向かうが、学食はとても混雑していた。最後尾に並び話しながら待つ。僕は薫さんと会えたが、昼御飯を食べ、少しだけゆっくりしたら戻るつもりだった。その事を薫さんに言うと

「んゝ残念ねゝまあ仕事だししょうがないか…じゃあ教室まで一緒に行こうかなあ。」

と言ってくれた。もちろん了承した。

その後は取り留めのない話をしていた。気づいたら、券売機の順番が回ってきていた。

「隼人君は何食べるの？」

「うゝん…月見うどんの大盛にしますかね。」文化祭当日のためかメニューが少なくなっていた。

「じゃあ私は月見の普通にしよう。」

僕は月見うどんの券を2枚買い、大盛の券を1枚買った。

薫さんにうどんの券を渡すと、薫さんはお金を差し出した。そして、今度は麺類の列の最後尾に行った。麺類の列では長かったのだが、意外とすぐに僕達の番に回ってきた。

僕は券を渡しながら

「おぼちゃん、大月見うどん」

薫さんは

「月見うどんお願いします。」と言っていた。

注文を受けるとすぐに調理がされ始める。少し待っている間にうどんは完成していた。

「はいっお待ち。」

おぼちゃんはそう言いながら、うどんを出してきた。

受け取り、トレーに乗せ、空いている席に行き、食べ始めた。

薫さんは両手を合わせ

「いただきます。」と言い、食べ始めた。

僕も箸を持ちながら

「いただきます。」と言い食べ始める。

「いつもお昼はここで？」

薫さんは麺を冷ましながら聞いてきた。

「ふあい。」

僕はというと、口に入れた麺がまだ熱かったのと入れすぎてしまった、変な返事を出してしまった。

薫さんはそれを見て微笑んでいた。

「ふふ。そういうば隼人君、勉強はどう？」

「ま、まあ…いちよ頑張ってます。」

薫さんは苦笑いをしている僕を見て、こう言ってきた。

「高校生だもんね、遊びたい気持ちは分かるわ。まあでも隼人君な

ら勉強と両立できるわよね？」言葉ではそう言っているが、目は結構マジだ。

「は、はい」（何かこえな……）

あの場で僕は無理とは言えなかった。

それでも僕はとても楽しめた。うどんも食べ終わり、落ち着いたので、

「そろそろ仕事があるんで…」

と切り出すと、

「そっか、厨房の担当だから忙しいんでしょう？わざわざごめんね。」急に薫さんが謝ってきたので僕は

「いやいや、薫さんこそ忙しいのにわざわざ来てくれて本当にうれしかったです。」

と答えた。

薫さんは少し慌てている僕を微笑みながら見つめ

「じゃあ行こっか。」

とトレーを持ちながら立ち上がった。僕も急いで立ち上がり、片付けに行った。

食堂を出た僕と薫さんはそのまま2人で僕の教室に向かった。

「お店は忙しい？」歩きながら薫さんは聞いてくる。

「まあ、なかなかです。いちよ喫茶店で、さっきまで昼時でしたからね。」歩きながら、僕は答える。

「大変だねえ」

「あ、見えました。あそこの教室です。あ、あとこれ…」と言いなから僕は財布からチケットを取り出し、薫さんに渡す。

「ん？これ何？」

受け取りながら薫さんは聞いてくる。

「それクラスの身内の割引券です。注文の時に渡して下さい。じゃあ僕行きますね。」

「ありがとつ。隼人君頑張つてね。」

「はいっ」

そう言っていると僕はクラスの厨房の所へ向かった。

「ただいま」

厨房にいた委員長に帰った事を告げる。

「もういいの？まだ楽しんでくればいいのに。」

「いいんちよこそ休憩にしなよ働きっぱなしでしょ？疲れるよ？」

朝から休憩なしで働いている委員長の事を心配すると

「でも……」なかなか諦めない委員長に、

「なら今暇だからこの椅子に座ってなよ。」と声をかけながら、椅子を委員長の方に持つていく。

「わ、分かったわよ。」

諦めた委員長は僕が差し出した椅子に座っていた。

僕は出された伝票を見て、調理をし始める。昼過ぎだからかお客さんは御飯を食べに来るのではなく、ゆっくりしていく人が多い。だから僕も落ち着いて調理している。

ちなみに他の厨房の人は委員長が遊びに行かしたらしい。それでも自分はクラスの委員長だから遊びに行つてないと自分で言っていたその時ウェイター係が僕に話しかけてきた。

「八城君、特製ケーキ残ってる？」

「ちよつと待つて。」急いで確認しに行く。

ちなみに特製ケーキとは当日に女子達がつつたこのクラス特製のケーキである。

特製ケーキはあと3人前程度しか残っていなかった。

（結構人気なんだなあ……）

「後、3人前くらいなら残ってるよ。」

と言つと

「分かった」

と言つて、お客さんの所へ戻つて行つた。少しすると戻つて来て、

「ケーキ1つにアイスミルクティー1つ。」と言いながら、伝票を渡してきた。

ケーキを取り出して切り、座っていたはずの委員長はいつの間にか

立ち上がって、ミルクティーを用意してくれた。

「休んでくれていいのに。」

「この位は私も手伝うわよ。」

用意できた物を係に渡そうとすると

「隼人君が出してきなよっ」

「え？」係の子に聞き返す。

すると、すぐニヤニヤしながらこう答えてきた。

「知り合いなんでしょ？あの綺麗な人と」

それを聞き、薫さんだとすぐ分かる。

「わ、分かったよ。」と言いながら、渡しに行く。

「お待ちどお様です。」薫さんの目の前にケーキとミルクティーを出す。

「あ、隼人君ありがとう。」

「ゆっくりしてって下さい。」と言って、僕は戻った。

そこにはさっきまでいたはずのウェイトレス係の子と委員長はいなかった。

「…委員長はまだいいとして、何であいつまで……」

それでもウェイトレス係は1人だけではないので、問題はそんないだらう。

暇なので調理器具周辺の掃除をし始めてすぐに2人は戻ってきた。

委員長は顔が真っ赤でウェイトレス係は笑顔だった。

「いんちょ、どしたの？」

心配だったので、ちよつと聞いてみる。

「な、何でもないっ！それ、それよりあの綺麗な女性は？」

顔を真っ赤にしながらも委員長は聞いてきた。

「ん？薫さんの事かな？薫さんは隣に住んでる人で、ほぼ一人暮らしの面倒を色々見てくれる人だよ。」

（そして、俺の憧れの人でもある……）

もちろん口には出していない。

「そ、そうなんだ。なら良か、な、ならサービスした方が良いんじゃない？」

「割引券も渡したし、僕の知り合いだけってのは悪いからいいよ。」

「そ、そう……」

そんなやり取りをしながら、僕は掃除の続きを再開した。

ある程度片付いた時、薫さんは立ち上がり僕に声をかけ、帰って行った。

その後は特になにもなく、時間は過ぎていった。帰ってきた厨房の係と一緒に楽しみながら、仕事をした。気付くと1日目はあつと言う間に終了していた。

そして、次の日つまり文化祭最終日も何事もなく過ぎていった。

そして、文化祭が終わった。

文化祭の終了が告げられた時、僕はこれから待ち受けている今まで以上の長くて辛い道のりを感じた。

そして、その時僕の髪を風が揺らしたのを覚えている。

それが夏を連れ去った風と同じ風だったかどうかは分からない。

第8話（後書き）

今回も読んでくれてありがとうございます

えと…最後の部分がちよつとぐだぐだになってしまったのは俺の文章力のせいです…すいません…

けど何とか形にできたので良かったです

あと、今回の話でとりあえず夏〰秋の話は終了です（分からないけど…）

その内番外編書こうかと思っているので、本編はすぐには始まらないと思います

何か番外編のストーリーで希望があったら教えて下さい

長々とすいませんでした
でわでわ……

第9話（前書き）

この九話を投下するにあたり、今までのサブタイトルを多少変更しました。

何か意見があったら（前の方が良かったなど）教えて下さい。

第9話

あれから僕は日々地道に勉強を重ね、成績も徐々に上がっていた。

そして、冬休みを迎えようとしていた。

赤い洋服を着た、プレゼントを配るとされている架空のお爺さんが働きだすまで、あと約1週間と迫ったある日、久しぶりに早く帰ってきた、母親と晩御飯を共にしていた。

「隼人、あんたまた料理の腕上げたわね。お嫁にでもいくつもり？」今日の晩御飯はシチューだった。少し多く作ったので、薫さんたちの家にもさつき少し分けてあげに行っていた。

「嫁にいくつもりはないよ。まあ母さんよりはもう上手い自信はあるけどね。」

「あ言うようになったわね。」

母親とたが本当に久しぶりの家族での食卓。薫さんやおばさんと食べる事が最近もよくあるが、それでも何かが違う。

そんな事を考えていると、母さんがこんな事を聞いてきた。

「隼人、12月末は用事あるの？」

カレンダーを見て、確認し答える。

「んゝ冬期講習がいちよあるよ。」

「そつかゝなら行けないね。じゃお留守番よろしくね。私とパパと知子さんでちょっと温泉旅行に行ってくるから」

...

.....

..... そんな事聞いてない

「か、母さん... き、聞いてないんだけど...」

「ああ、ごめんっ言うのを忘れてたからね。まあお金は多めに置いておくし、私たちも久々に羽伸ばしたいし、知子さんにも色々お世話になってるしね。」

「まあ、いいや。別に慣れてるし。」

「じゃあよろしくねっ。」

「はいはい。」

そんな話をしながら久しぶりの家族との食事は過ぎていった。

「御馳走様でした。」

そう言いながら僕はスプーンを置く。

ゆっくり立ち上がり、食べ終わった食器を台所に持って行こうとすると

「いいわ、隼人置いといて。私もたまには母親らしい事をしなくちゃね。」と母さんが言ってきた。

「分かった。ありがとう。」

僕は部屋に行き、勉強に取りかかり始める。ある程度問題を解き、ふとカレンダーを確認する。そこは「塾」の1文字でかなり埋まっていた。前、これを見た海や春華が心配していた。

「お前こんなにいれて大丈夫か？」

海が真顔で聞いてたな。

「ああ。」

僕この時は少し笑っていたかな。

「隼人、あんまり無理しちゃ体に悪いからね。」
春華も心配してくれてたな。

「ああ。やばくなったら2人のところに行くさ。」

「来い来い。」

「仕方ないわねっ。」

「ありがとう。」

2人はその後はいつもと変わらずに接してくれた。

「ふう……」

溜め息なのか分からないものが僕の口から漏れた。

その息は僕には白く見えた。本当だったら白いはずはない、暖房の入っている部屋の中だからだ。その息がなぜ白く見えたのかは分からない。

寒くなっていく日々。

少しずつ減っていく残りの高校生活。そして、僕はあの冬休みを迎える。

第9話（後書き）

今回もありがとうございました。

前から書く書く言っていたサイドストーリーをそろそろちゃんと書く
こうかと思っています……

きつと……いや絶対次回はサイドストーリーをやりますw

第10話（前書き）

やっと10話まで来ましたよ…長かった…

今回の話も読んで下さい（いや…ほんと…暇な時間でいいんで…

第10話

「はい…じゃあ、今日は終わりです。今度の授業の宿題忘れないでね。気をつけ…はい、礼…」

先生の挨拶が終わると同時に授業の道具を片付けていく。

「おい、隼人…今から一緒に飯行かない？」

隣の席の男子が話しかけてくる。

「ごめん。今日これから友達と待ち合わせあるから。本当にごめん…じゃあもう帰るね。」

僕は上着を羽織り、席を立つ。

「分かった…また今度な…」

「うん。じゃね。」

僕は1人で駅へと向かって行く。

なぜここまで急いでるかと言うと、今日は海、春華とクリスマスパーティーをする予定があるからだ。

待ち合わせ時間まで少し余裕がありそうなので歩くスピードを少しゆっくりにした。

場所は僕の家だ。塾で遅くなる僕のために2人が開始時間を遅らしてくれた。

待ち合わせの地元の駅に行くと、2人はもう待っていた。海はファーストフード店の箱そして春華はケーキの箱を持っていた。

海がチキン、春華がケーキそして僕がその他の食べ物類を担当している。これが僕達のクリスマスパーティーの形なのだ。

「ごめん、待った？」

と僕が聞くと

「いや、大丈夫今来たとこだよ。」

「塾お疲れ…さあ行きましょ。」

と海と春華が言ってきた。

「じゃあ、行こうか。」

少し家に向かって道を進んでいると

「隼人、勉強どうよ？」

と海が聞いてきた。

「まあ、頑張ってるよ。」

「馬鹿なりに？」

春華の声が聞こえているのは気のせいだろう…

「そっか。無理すんなよ。」

「ああ、海、ありがとな。」

「シカトするなあー！！」

春華がそう言うのと同時に僕達は笑った。

「ただいま。」

僕は家のドアを開けて入る。

「お邪魔します。」

「お邪魔します。」

2人とそのまんま食卓に行く。僕はキッチンに行き、塾に行く前に用意しておいた物を冷蔵庫から取り出したりしだす。

「隼人、このサラダ運んでいいのか？」

スープを温めている僕に海が話しかけてきた。

「あ、うん、お願い。」

「隼人、ケーキ冷蔵庫に入れるよ。」

食事の準備ができるまではこんな感じでバタバタしていた。そして準備ができたテーブルの上にはとても豪華な料理が揃っていた。

その料理とは僕が作ったサラダ、クラムチャウダー、フライドポテト、パスタそして手作りのフランスパンを切ったのには色々な物が乗っている。それに海が買ってきたフライドチキン。そして春華が作ったケーキが冷蔵庫に入っている。

「用意できたし、食べるか。」

テーブルを確認し、俺が言う。

「よっしー!!」

「お腹減った」

海と春華がすぐに椅子に座る。

俺も少し遅れて椅子に座る。

「じゃあ…メリークリスマスー!!」

俺がそう言い一呼吸置く。

そして

「いただきます。」

「いゝいただきます。」

「いっただきますっ。」

みんなで食べ始めた。みんなでいると話は尽きない。

僕と海はガツガツという擬音が聞こえてくるくらい食べる。

「あんたらもうちょっと落ち着いて食べれないの?」

ガツガツ

「……。」

ガツガツ

「……………」

ガツガツ

「シカトしてんじゃないわよっ!」

「いただきます」

ヒヨイ

「ああー！！それ私のっ！！」

その時玄関のチャイムが鳴った。

「ごめん、ちょっと行ってくる。」

小走りで玄関まで行き返事をする。

「はい。」

そこから返ってきた声は予想外の声だった。

「あゝ隼人君。薫でーす。」

俺は急いでドアを開けて、玄関内に薫さんを入れる。

「どうしたんですか？」

「メリークリスマスー！！」

「あ、メ、メリークリスマスです。」

「よろしい。」

薫さんが満足そうに頷く。

「で…どうしたんですか？」

「今日は隼人くん…ん？あれお客さん来てた？」

玄関の海と春華の靴に薫さんは気づいた。

「あ…はい。友達とパーティーやってたんすよ。」

「あ…ごめん。じゃあまた明日でも来るかな。」

「そうですか…わざわざすみませんでした…」

「気にしない、気にしない。じゃあ、隼人君、おやすみ」

「おやすみなさい。」

薫さんが帰ったので、僕は戻る。

「遅かったな」

海が早速聞いてきた。

「薫さんだよ。」

と答えると

「見に行きや良かった…」

海は舌打ちをしている。

「薫さんって？」

分からない春華が聞いてくる。

「いや、隣にいる人だよ。」

「ふむふむ。」

そこで薫さんの会話は途切れた。

「さ〜てケーキ食べますか〜」

春華が満面の笑みを浮かべている。

春華手作りのケーキはとても美味しかった。普通の料理の腕は知らないけど、お菓子はとても上手だと思う。

僕が冷蔵庫から持ってきたのを切り分けて、食べ始める。

「春華、これ美味しいね〜」

「うん、美味しい。」

「そりゃ〜春華ちゃんの最新自信作ですから〜」

笑い声が途切れはしなかった。

「さあて…恒例のプレゼント交換しますか？」

食べ終わったのを見計らい、海が言った。

ちなみに恒例のプレゼント交換とは毎年このクリスマスパーティーの時に互いのプレゼントを用意して渡すのだ。2人に渡すので、あまり無理して高いものは買わないという約束がある。

今年僕は海と春華にストラップを用意していた。

「じゃあ、俺からな。」

海がスツと立ち上がり

「はい、これは春華へ。で、こっちが隼人へのプレゼント。メリークリスマス。んでこれからもよろしく。」

「ありがとう。」

春華と僕は海からプレゼントを受け取る。

「次、僕ね。はい、海これからもよろしくね。」

僕は海にプレゼントを渡す。

「で、こっちが春華へ。春華これからもよろしく。」
春華にプレゼントを渡す。

「じゃあ、私の番ねっ。はいっこれが海。こっちが隼人。これから
も仲良くしましょうねっ」

春華が海と僕にプレゼントを渡す。

「開けても…」

僕

「いいんじゃない?」

海

「うんっ」

春華

春華からのプレゼントはネックレスだった。

「春華…お前…これ、値段高くないのか?」

海が恐る恐る尋ねる。

中身を確認すると、高そうだった。

「それ高いと思う?」

「うん。」

「当たり前だ…」

僕と海がほぼ同時に答える。

「良かった〜それ私を作ったんだよ〜」

「ええええ!?!」

2人が同時に叫ぶ。

「それひどいなあ〜材料買って、作ったんだよ〜まあ焼くのに学校の
美術室かりたけどね。」

「いや…かなりすごいよ。本物かと思った。」

海が驚きの声を上げる。

「うん…すごい、上手いな。ありがとう、春華。」

僕も本当に驚いた。それくらい春華の作品は凄かった。

「もう、私のはいいから、隼人の見ましょ。あつ…でも私の付けて
ね。」

そう言いながら、春華は僕のプレゼントを開けてった。

「じゃあ、俺も…ん、ストラップか。」

「可愛い隼人にしては良いものじゃない」

「う、うるせな。海のプレゼント開けようよ。」

海のプレゼントは帽子だった。

「かつこいゝ海ありがた」

「海〜!!!!!! どういう事よ!!!!!! 説明しなさいっ!!!!!!」

僕の海への言葉を遮った春華の目の前には大量のお菓子が置いてあった。

「ん？ いや、春華、最近体重の事気にしてたから」

「氣にしてる人にこういう物を送る？」

かなり春華はきている。

「結構その量は高かったんだぞ。」

「……海？」

「ハハハ、ご、ごめんって。」

「ブツ……ワハハハハ、腹いてえ」

堪えきれなくなつた僕と海が吹き出す。

「あんだ達」

こうして僕達のクリスマスは過ぎていった。

しかし、この年のクリスマスは僕にだけもう1日用意されていた。

第10話（後書き）

今回は番外編に近い形ですが、次話からは薫さん出しますよ
本文で次の話に繋げる雰囲気の部分があるので、どんな話が予想は
つくでしょうけど……

では、次回も楽しみにしていて下さい。

第11話（前書き）

第十一話投下します

今回は隼人と薫がまあ…まだ内容は言いませんw

とりあえず楽しんで読んでいただけたらうれしいですよければ読んでいって下さい

第11話

クリスマスパーティーの次の日、今日は学校が休み、塾は午後からだった。授業まではまだまだ時間があったので薫さんにメールを送った。

「こんにちは。昨日は何の用事だったんですか？」

数分後、携帯が揺れた。

そして、携帯はEメールを受信の画面ではなく、着信の画面で、そしてその電話の発信者は薫さんだった。僕は慌てて携帯に出る。

「は、はい。」

「急にごめんね。電話の方が早いと思って。今、大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

「良かった。昨日の事の前に、隼人君は今日も塾？」

「あ…はい…」

「お母さんとかお父さん今日も遅いの？」

「まあ…」

「なら丁度いいわ。今日は外で晩御飯食べないでね。後、寄り道しないで早く帰ってくるのよ。」

「ハハハ、わ、分かりました。」

「じゃあ、後でね。」

「はい。」

そこで電話は薫さんとの電話は終わった。僕は携帯電話を机に置き、机の引き出しを開けた。そこには先日買った薫さんへのクリスマスプレゼントが置いてあった。

「今日渡さなきゃ…」

それからの時間はあつと言つ間に過ぎていった。塾の授業もすぐに終わった。急いで帰宅した僕は薫さんに電話をした。

「あつ隼人君帰ってきた？」

「はい、今僕の家です。」

「じゃあ、ちょっとこっち来てくれない？」

「分かりました。今から向かいます。」

「待ってまゝす。」

僕はプレゼントを持ち、家を出る。薫さんへのプレゼントはネックレスを用意した。

すぐに着いて、チャームを押す。

「はい、はい。」

「こんばんは、隼人です。」

「いらつしゃい。さ、どぞどぞ」

「お邪魔します。」

薫さんに呼ばれながら家に入る。そして、そのままテーブルに案内される。そこにはとても美味しそうな料理が並んでいた。

「あら、隼ちゃん来てたの？」

後ろから知子おはさんに話しかけられた。

「あつはい。お邪魔してます。」「気になくていいのよ、さあ、

薫ちゃんの手料理早く食べちゃって、じゃあ、ゆっくりしてってね」

知子さんはそう言うと、部屋に戻っていった。

「と言う事で隼人君いっぱい食べてね」

「はい、その前に…1ついいですか？」

「ん？何？」

「あの…薫さんとかおばさんの…」

そう、テーブルには明らかに1人分の料理しか置いてない。

「あ、もう私達は先に食べちゃったから、いいのよ」

「え？僕のためにわざわざすみません…」

「良いんだって、もう良いから早く食べなさい。」

「分かりました…じゃあ、いただきますっ。」

それから僕は食べ始めた。その様子を薫さんは何か嬉しそうに見て

いた。

「美味しい?」

「はいっ」

「じゃあ、隼人君と私どっちが上手だと思う?」

僕は食事の手を止めて答えた。

「じゃあノーコメントって事で。」

「何だところもう作ってやらないぞ」

「すいません…薫さんの方が僕よりかなり上手ですよ。」

「よろしい。…フフ…」

「ハハハハハ。」

笑っている薫さんはとても綺麗だった。手を伸ばせば触れられる距離なのに、僕の気持ちは届いていない。

「ごちそうさま」

「おっ?全部食べれたのか」

そこにはちよつと驚いた顔の薫さんがいた。

「えっ?」

「いや、ちよつと隼人君の分を作りすぎちゃったと思ってたんだよな」

「だから、あんなにたくさんあつたんですね……」

「さあ、次はケーキにいつてみよう」

「話そらさないで下さいよっ」

この空間には僕と薫さんしかない。けれど、その空間が僕の望むような空間になる事はきつとない。

「うんこのケーキは普通だったな」

「そうですか?美味しかったけどな」

「それより隼人君にこれっ」

薫さんが僕に差し出した手の上には綺麗にラッピングされた箱があった。

「これ隼人君へのクリスマスプレゼントよっ隼人君の好きなもの分らないから、私の好みで選んじやったから、気に入らなかつたら使わないでね。」

「いい良いんですか？」

「別に捨てても良いよっ」

「あついやっそう言う意味じゃなくてですね…そのも、貰っても良いのですか？」

「当たり前じゃないっ隼人君のために買ったんだから。」

「ありがとうございますっあ、僕からもプレゼントがあるんですよ、どうぞ。」僕は慌てて、薫さんにプレゼントを渡した。

「ありがとう開けてもいい？」

「はい。どうぞ、どうぞ。」

丁寧に僕のプレゼントを開ける薫さん。

「わあ〜可愛い〜」

「良かったです…あんまり分からないから店員さんと色々話したんですよ…」

「フフッ、ありがとう。隼人君、私のも見たら？」

「じゃあ失礼します…」

綺麗に包装されていたプレゼントからは香水が出てきた。

「うわ〜高そうな物をわざわざ…」

「良いのよ、気にしないでちょーだい。」

薫さんが微笑む。

今この空気を変えたい。

接したい。触れたい。

薫さんともっと一緒にいたい。

「あの…薫さん…」

言うのか？言えるのか？

「どしたの？」

「あの…か」

「あれ？まだ隼ちゃんいたの？」

僕の言葉を遮ったのは自分自身でもなく、薫さんでもなく、知子おばさんだった。

「あつはい。もう帰るところです。」「あんまり根詰めすぎて体壊しちゃわないようにね。じゃあ私は寝るわね。おやすみ。」

「ありがとうございます。おやすみなさい。」

「おやすみなさい。」

知子おばさんはまた自分の部屋に戻って行った。

「…で、隼人君さっき何言おうとしたの？」

「え！？あ…いや…あんな高そうな物をわざわざありがとうございます！……ますと思つて…」

結局言えなかった。しかし言えない状況を助かったと思っっている僕自身が確かにそこにいた。

「それだつたらお互い様じゃない。いいのよ、気にしないで。大切に使用してもらうつわっ」

「その…わざわざ料理とかも作ってもらったし…」

「もういいって…あんまり言うともう作ってあげないよ？」

薫さんは頬を膨らましていた。

「ブツ…」

「あつ？今笑ったでしょ？心外だなあもう作ってあげないっ」「すいませんって」

それから少し薫さんと話し僕は帰宅する事にした。

風呂に入り、寝る直前にベッドの上で僕は薫さんからもらった香水を眺めていた。香水の瓶には「summer snow」という銀色の文字が光り輝いていた。

「summer snow…夏の雪か…」

僕は徐々に夢の中に潜って行った。その途中に僕は薫さんの薫りを少し感じた気がする。

こうして夜は更けていった。クリスマスの次の日が…

本当は何もない日だけど、僕にとってはとても大切な”もう1つ”のクリスマスの日。

もしあの時薫さんにしっかり言えていれば僕、そして現在は変わっていただろうか…

けれど、どんなに悔やんでも、悲しんでも、悩んでも戻る事はできない。

時は戻ってくれないから……

第11話（後書き）

今回もありがとうございます
どうでした？

で、ちよいと無駄話（お前の話何か聞きたくないって人は一番下までいって下さい）

いやゝさつき一話とかの前書き見たんですけど、最初書き始めた頃は前書きとか後書きめちゃくちゃ固いし、変っすねw俺笑いましたもんw

あの頃は本文考えるより疲れましたもん……

まあ編集し直す気はないですけど…

多分これからはこんな感じで、軽〜くやってきますわ

【←ここからまともな話】

改めて今回もありがとうございます

今回の話はどうでした？

隼人は頑張りましたねゝここまできて薫さんは気づいてるんですかねゝ（作者も分からないw

まあ大まかな流れは出来ていますんで（勿論完結の仕方も…

次回も楽しんでって下さい
長々とすいませんでした

第12話（前書き）

13話投下です

まだまだ未熟な小説ですが、読んでもらえたら嬉しいです

第12話

「行つてきまーす。」

「隼人、留守番よろしくな。」

母さんと父さんはそう言つて、3泊4日の旅行に出て行つた。もちろん隣の知子おばさんも連れてだ。

その間は家は僕だけになるが、いつもの生活とほとんど変わりはない。ただ、1つだけかなり違う事があつた。

それは両親が旅行中の間知子おばさんも留守なので（母さんが誘つて連れてつた。）薫さんが朝ご飯を用意してくれ、僕が晩ご飯を薫さんの分も作る事になっていた。朝食の食パンとベーコンエッグを食べていると海からのメールが着た。

「大晦日から三が日くらいは塾休みだよな？」

僕はすぐに返信した。

「休みだよ。両親が旅行に行つてるからうち来ない？年越しして、初詣行こうよ。」

「いいね、春華にも言つてみるよ。」

そのメールを見て、僕は学校の宿題に取りかかった。

それから2時過ぎに遅めの昼食を取り、また宿題に取りかかった。シャーペンを置いて一息付き携帯を見ると海からメールが着ていた。

「春華が連れてきたい友達がいるらしいんだが大丈夫か？だつて」

（友達？…誰だろ…）

気になった僕は聞いてみた。

「その友達って誰なの？」

少し気になった僕は勉強を中断して少しメールに専念する事にした。

「俺も聞いてみたんだけど秘密らしいよ…」

「僕の家呼ぶのに誰か教えてくれないのかよ……まあいいや」

「確かにそうだな…まあ隼人がいいって言つなら何も言わないよ。」

「じゃあ大晦日の日に行くから」

「分かった」

これで海とのメールは終わった。春華が連れてくるという友達が気になったが、海にも内緒にしているくらいだから、僕が聞いても答えてくれないだろう。

それから僕はキッチンに行き、晩ご飯を作り出した。

「さあ、作りますか」

それから僕は調理に取りかかった。その日は豚汁に西京焼き、おひたしそして白いご飯にした。

「おしつ、完成」

後は盛り付けるだけになったので薫さんに電話をした。最近は薫さんに電話をする時も変な意識をしなくなった。まだ緊張はかなりするけど……

プルルル

「はい」

「あ、薫さんですか？」

「はいはい、もちろん薫さんですよ」

「えっと……晩ご飯できましたよ」

「じゃあ、今から行くね」

と薫さんは言うと、すぐに電話を切った。そしてすぐに玄関から声が聞こえた。

「隼人くん、薫ですよ」

慌ててドアを開けるとそこにはスーツ姿の薫さんがいた。

「隼人くん、やっほー」

「こんばんはです。あつどうぞ」

薫さんを家の中へ通す。

「お邪魔します」

薫さんをテーブルへと案内する。

「今、持ってきますからちょっと待ってて下さい」

「私もそれくらい手伝うよ。」

薫さんは僕の後ろに着いてきて、僕がよつた物を運んでくれた。
「あっそれで終わりです。」

「はぁい。」

「何か手伝ってもらってすいません……」

お茶を運びながら、僕は言った。

「こんくらい気にしないでいいのよっそれより早く食べましょ？」

薫さん椅子に座りながら答えてきた。

「そうですね。じゃあいただきます。」

僕も椅子に座りながら答えた。

「いただきます。」

そして2人で食べ始めた。

「な、何か新鮮ですね。」

薫さんが箸を止めて、不思議そうな顔をしていた。

「何で？」

「いや、何か薫さんスーツだし、それに今日は僕の家だし……」

そう僕が答えると、薫さんも微笑みながら言ってきた。

「確かに、そうね、それより、新婚さんってこんな感じかなあ」

薫さんがいきなり変な事を聞いてきた。

「ブファッ！ゲフッゲフッ！！」

そんな事を聞かれた僕は飲んでいたお茶が変な所に入ってしまったて、
むせていた。

「隼人君、大丈夫？」

「ゴホッゴホッ……が、がおるさんがえんな事言うからですよ……（薫
さんが変な事言うからですよ……）」

そう僕がむせながら答えると、それを見て薫さんは笑っていた。

「ごめんね」

「いや、もう大丈夫です。」

「なら、良かった」

それからは普通に会話をしながら、晩ご飯を食べ終えた。

「ごちそうさま。隼人君美味しかったわ。」

「あっありがとうございます。」

「そう言えば隼人君は何時頃に起きるの？」

「え」と……今は冬休みなんで9時頃ですかね」

「そっか……なら朝ご飯どうしよう……」

「あっなら僕早く起きますよ。」

そう僕が提案すると、薫さんは苦笑いしながらこう答えてきた。

「いや〜でも悪いし……」

「いやいや大丈夫ですって。」

「本当に大丈夫？」

少し頬を膨らます薫さんがとても愛おしかった。

「はいっ」

すると、少し考えていたが、笑顔で答えてくれた。

「じゃあ明日からも早く起きてね」

こうして薫さんと出会った忘れられない年の残りの日は少なくなっていた。

そして、これからも変わらない生活が続いていくとあの時は信じていた。

しかし、僕の予想はいきなり碎かれる事になっていた

多分、僕の時間が動いてなかったからかもしれない

第12話（後書き）

今回の話はどうでしたか？

予定では大晦日〜新年までこの話にいれるつもりだったんですけど
ねえ……

かなり多くなりそうなのでやめときました
正直、今回のタイトルかなり悩みました…

もしかしたらこの物語が完結する前に今書き貯めしている方が早く
終わるかもしれないかなあと思ったり思わなかったり

では、次話も早めの投稿を心がけていきたいと思います

今回もありがとうございました

第13話（前書き）

まず、先月（6月）は皆さんのおかげで【夏の薫り】月の読者数が84人で過去最高です！！

そして、それだけじゃなく合計読者数400人突破もしました！！
（現時点では420人でした

本当に皆さんのおかげです

ありがとうございます

これからも頑張っていくので、読んでいってください

では、これより本編の始まりです

第13話

ブーブーブー

携帯が机の上で揺れていた。

「もしもし。」

「隼人ー今駅着いたから。みんなで今から行くから待ってなさい！
！」

「え！？は、春華！？」

慌てて尋ねた僕の質問への答えは電話が切れた事を表す音だった。
ツーツー

「…はあ」

ため息をつくのもほどほどに僕は家を少し片付け始めた。

春華の電話から少しした後にチャイムが鳴った。

「はーい。」

ドアを開けたそこには海、春華そして委員長こと「空河^{ソラカワ} 恋歌^{レンカ}」がいた。

「よっ、隼人。」

「ついたあ」

「は、隼人君こんにちは…今日はきゅ…急にごめんね…」

「あ…いいんちよだったんだ。」

「早く家にいれろ」

僕と委員長の会話を春華が遮ってきた。ちなみに海はその様子を笑顔で見ていた。

「春華はうつさいな」はい、どうぞ。」

「おっじゃましまっすっ」

「おじゃましますっ。」

「お、お邪魔します。」

3人をリビングに通すと春華と海が宿題を出し始めた。

「さて〱宿題終わらせるわよ」

「そうだね。」

「そうだ、隼人〱あんたあと、どんくらいよ」

春華が明らかに僕を馬鹿にした目で見てきた。

（また絡んできたよ……）

「あと…半分くらいかな…」

馬鹿にされるのを覚悟しながら答える。しかし、その言葉に春華はいつもと違う反応だった。

「え！？何〱！！隼人ごときに差が少ししかないじゃない！！」

春華はそう叫ぶと自分の宿題に取りかかった。

「ごときって何だよ…ごときって…」

「うるさいわねえ〱私が隼人と同じくらいに宿題終わらせるとか私のプライドが許さないのっ！！」

「はいはい…」

海はいつもの光景を特に気にせずに委員長に話しかけた。

「空河さんも早く終わらせよっか？」

「あっ！！はい！！」

委員長はと言うと僕と春華のやり取りを見て、呆気に取られていた。

それから数時間後…

「よし…これも丸つと…よし…終わった〱！！」

隣で春華が自分の宿題を片付け始めた。

「春華〱やつと終わったの？」

ソファアの所で委員長と話していた海が春華に話しかけてきた。

「海と恋歌は何であんなに早く終わってるのよ！！」

「空河さん、何でだろうね？」

「何ででしょう？クスクス」

（息合ってるなあ……）

春華があんなに早くと言うのも納得できる。2人は僕の家で勉強し始めてから1時間も経たないうちに宿題を終えていたからだ。

それから少しした後、僕はまだ宿題が終わっていないが勉強を止める事にした。

「隼人！今日晩ご飯どうするの？」

春華が宿題を片付けている僕に聞いてきた。

「そば買ってきてあんだけど、いいでしょ？」

「おっ年越しそばいいね」

「八城君…お、お金は？」

「ん？別にいいよ」

「いや…でも悪いし…」

「だったら今度は恋歌がご馳走すればいいじゃない。」

僕と委員長のやり取りを見ていた春華が横から口を出してきた。

「えっ！？は、春華何言ってるの！！」

委員長が顔を真っ赤にして慌てていた

「はいっそれで決まり」

春華が委員長と仲良くしている間に僕は海に近づき話しかけた。

「なあ、海…」

「ん？」

「飯の時さあ…薫さん誘ってもいい？」

「ああ…良いんじゃない？でも、どして？」

そこで僕は知子おばさんも両親と一緒に旅行に行った事を話した。

「まあそれなら良いんじゃないの？俺も１度くらいは会ってみたいしな」

「海、ありがとう。」

「ほれ早くあの２人にも言ってきたよ。」

「まじでありがとねっ」

そして僕は海と同じ内容の事を２人に話した。

「別にいいわよ」

「もちろん大丈夫ですよ…」

２人とも了承してくれたので、薫さんに電話した。

「もしもし…隼人君どしたの？」

「薫さん、今日晩ご飯の時友達いるんですけどそれでもいいですか？」

「私は全然良いけど…その友達が良いの？」

「それならみんな大丈夫だって言ってくれてます。」

「じゃあおじやましようかな…まあ、邪魔になりそうだったらさっさと帰るね。」

「何言ってるんですか？じゃあ今日も晩ご飯作っておきます。」

そう言っただけで電話を切ろうとした時、隣にいた海が携帯を奪い勝手に話し始めた。

「あつ急にすいません。もし暇なら今から来ませんか？」

海は薫さんと何かしら話している。そして

「はい、はい…全然大丈夫です…あつじゃあお願いします。はい…じゃあ失礼します。」

と言っただけで切ってしまった。携帯を僕に渡し、春華と委員長に話しかけた。

「薫さん今から来る事になったから。」

「はあ…い。恋歌捕まえたわよ。」

「キャッ！！海君わ、分かりました。春華やめてよ！！！」

春華が委員長を捕まえていた。

「おいっ春華止めとけって。」

僕が止めに入る。

「うっさいわね…いつもむさ苦しいあんたらといえるんだから、たまには可愛い女の子の声も聞きたくなるもんなのよっ」

「むさ苦しいってなんだよっ」

「あんたら2人の事よっ！！特に隼人よ。」

春華との言い合いが始まった。

「はいはい、やめろって。それに薫さんもう来るんじゃないの？」

海がそう言ったのと同時に玄関のベルが鳴った。「隼人、開けてきなよ。」

ドアを開けるとそこにはいつもと変わらない薫さんがいた。

「今日はごめんね」

「いや、大丈夫ですよ。」

それからリビングに行き、薫さんを紹介し、その後海、春華、委員長の紹介をした。

紹介が終わると春華と委員長はすぐに薫さんと話し始め、あつと言う間に仲良くなっていた。そしていつの間にかその3人が料理を作る事になっていた。

キッチンからは常に3人の笑い声が絶えなかった。

そして、僕と海はその暇な時間ずっと話していた

それからある程度時間がたった頃、薫さんと春華、委員長がそばを持ってきた。

「はい、お待ちどおさま。」

僕達の目の前にはできたての掛けそばが置いてあった。

「さあ伸びないうちに食べましょ。」

最後に薫さんが席につき、皆で食べ始めた。ちなみに僕と海はテーブルが空いていないので、小さなテーブルを持って来て食べていた。ずっとつけっぱなしのテレビからは今年の人気アーティストが曲を流していて、壁の時計は静かに今年の終わりが近い事を表していた。

少しずつ流れていく時

初詣に行くために家を出た。

「さむい」

手をこすり合わせている春華

「春華ちゃん手袋いる？」

自分の手袋を春華に渡している薫さん

「んゝこの時間帯混んでそゝだなあ」
1人伸びをしながら呟く海

「八城君…今日はありがとうね…」
寒さから頬を少し赤くして話しかけてくる委員長

冷え切った暗闇の中、僕達の満たされていた気持ちは寒さで凍る事なく、少しずつ少しずつ溶けだしていた。

そして、去年以上に色々起こった新しい年が始まった。

「あつ、新年よっアケオメ」

「おっもう新年かぁゝ明けましておめでとう」

「明けましておめでとうございます…これからもうろしくね…」

「明けましておめでとうゝみんな、よろしくね」

「明けましておめでとう」

第13話（後書き）

今回もありがとうございます

季節もあつたもんじゃないです
知らないです><

次の予定は今少し悩んでいます
新学期に行くか、初詣の話を書くか……

ただ、どの話になっても自分が納得できるように仕上げたいと思います

第14話（前書き）

今回は早く投稿できました！！

【注意：ここから先は作者のバカトークです。読みたくない人はとばしちゃって下さい。】

この話を書くか書かないかは結構悩んでまして、相談したり、悩んだりした結果、結局書くことにしました。

「それだと遅くなるじゃねーか！ばあーか作者！」

こうお思いの皆さんバカって言った人がバカなんですよ？w

とりあえず理由はですね、かなり構想ができていたんですよ……（それなのに悩むって……

ちなみに当初の予定ではこの話は前の話と一緒に予定だったんですよw
まあだから書くか書かないか悩んでたんです

かなり長くなりましたが、ぜひ読んでいって下さい

第14話

「うわっ人多いなあ」

僕達が初詣に来た少し大きめの神社には毎年行われている夏祭りの時以上の人が集まっているのではないかと思うほどの人がいた。

「はぐれちゃだめだからねっ」

春華はそう叫ぶと、神社の階段を上り始めた。春華と話していた海と薫さんがその後を歩き、そして僕と委員長が慌てて3人の後を追った。

「あっ!!」

「大丈夫？」

「う、うん…ありがとう…」

躓きかけた委員長を支えて前を見るとそこに3人の姿はなかった。

「やべっ見失っちゃった。」

慌てて目を凝らして探してみるが、見つからない。

「ごめんなさい…私のせいで…」

話す委員長はかなり真剣な顔になっていた。

「いいって。とりあえず2人で参拝済ましてから、みんなと合流しようか？」

「えっ!?!うん!!」

委員長は顔を赤くしながら答えてきた。

「3人にはメール送っとけば大丈夫だよね？」

携帯を開きながら、委員長に尋ねる。

「うん…多分、電話しても話しにくいだろうから、メールにしようかな?」

その言葉を聞き、海へのメールを打った。

「今委員長と一緒にいるんだけど、海とかとはぐれちゃったわ……参拝終わった後どっかで待ち合わせしよう」

そう打ち込むと、すぐに送信ボタンを押した。

「いいんちょ、寒くない？」

「うん、大丈夫。ふふ…八城君さっきも聞いてきたよ？」

委員長が笑いながら言ってきた。さっきも聞いた事に気づいていなかった僕は指摘されて、初めて知った。

「えっ！？さっきも聞いたっけ？」

「うん…でも、いいよっ嬉しかったから。」

「そ、そう。なら、良かった…」

（ん？嬉しかったってどう言う意味だ？…）

そんな事を考えている間も僕は少しずつ進んでいた。そして、賽銭箱に近づけば近づくほど人の波は込んでいった。

「いいんちょ、大丈夫？」

「う…うん。だ、大丈夫。」

その時、人の波が動いた。

「あっ！！いいんちょ」

僕がそう叫んだ時、冷気で凍えていた僕の右手を誰かが掴んだ。

「八城君、ご、ごめん。そ、そのはぐれちゃいそうだったから……」

僕の右手を掴んだ手は委員長の手だった。顔を真っ赤にしながら掴んでいるが、僕も女子と手を繋いだ経験なんて1度もないので、委員長に負けないくらい顔を赤らめていたかもしれない。「め、迷惑じゃ…なかった？」

委員長が下を向きながら尋ねてきた。

「迷惑じゃないよ……」

それから賽銭箱の前まで行くまで2人の間に会話はなかった。

「ありがと……」

委員長が握っていた僕の手をそっと離れた。

小銭を入れて鈴をならす。そして手を合わせながら、目を閉じ、願
い事を思った。

（今年もいい１年でありますように…とりあえず薫さんと今以上に
仲良くなればいいです…）

目を開けると委員長はまだ、目を閉じていた。そして、その後すぐ
に目を開け、１度お辞儀をしていた。

「とりあえず動こう。」

委員長と動き、人が少ない場所に行き、海からの連絡がないか携帯
を確認した。携帯には海からメールが来ていた。

「出口にいるよ」

委員長にその事を告げ出口に向かう。しかし、当然帰りの方が人の
波に逆らわなければならぬ。

「八城君…その…いいかな？」

「どうぞ」

僕は静かに右手を差し出した。その手を委員長が握ってきた。

「いいんちょは何お願いしたの？」

歩き始めながら委員長に聞いた。

「えっ！？私！？べ、別に何でもないよ……」

委員長は更に顔を赤らめた。

「良いじゃん、教えてよ」

「えと…そ」

委員長が何か言いかけた時、やっと人の波から解放された。そして、
すぐ近くに薫さん、海そして明らかに不機嫌な顔をしている春華が
いた。いつの間にか委員長は握っていた僕の手を離していた。

「２人ともはぐれないでって言ったそばから離れるって何考えてる
のよっ！！」

春華は完璧に怒っていた。

「はいはい…春華ももう良いじゃん。んな、怒んなくて…」

「その…私が転んじやったから…」

「えっ！？」

「八城君に支えて貰って、気づいたらみんななくて…」

「ご、ごめん…その知らないのに……」

「いいのっ気にしないで」

春華が珍しく落ち込んだ顔付きで、それを委員長が慰めているという想像できないような構図だった。

「ほら、冷えちゃうからもう戻る？年寄りにはこの冷気は厳しいんだぞ？」

黙って見ていた薫さんが切り出した。

「まだ若いじゃないですか」

「そうですよ」

薫さんの言葉で春華と委員長は笑っていた。

「なあ…隼人…」

真剣な顔をした海が僕に近づいて来た。

「何？」

「…………ごめん、いいや。何でもない」

少し考えてから海が答えた。

「教えるよ」

海の言葉が気になった僕は海に飛びかかった。

「ためっ」

「あんた達みつともないからやめなさいよっ!!」

それに気づいた春華が何か言い出した。

「春華はうっさいなあ」

「ねえ年寄りにはこの冷気が……」

僕が言いかけた時、薫さんがまた言ってきた。

「若いでしょ!!」

「ハハハハ…そりゃどーもです。」

僕達全員の突っ込みに薫さんはただ苦笑いしているだけだった。

「そろそろ帰ろう。」

誰かが言った言葉に僕達は静かに従った。

こうして僕達の元旦そして冬休みは過ぎていった。
僕達の歯車は確実に動き出し始めていた。
僕達の意志とは全く関係なく……

第14話（後書き）

ああ〜どうでした？

恋歌可愛くないっすか？

今回の勝手に初めて考えた俺テーマは『読者全員恋歌にキュンキュンさせる』だったんすよwww

正直、隼人とか薫さん云々の前に俺が心動いてますw

いや、文化祭の話に出した時から再び登場させる予定でしたからね〜
これからもっともっと色んな展開にしていきますっ

でわ、この辺で失礼しま〜す

第15話（前書き）

15話投稿します

良ければ読んでいっして下さい

第15話

「よしっみんな集まったわね」

春華が深刻な面持ちで話す。

周りには僕、海そして委員長。

「じゃあ…いくわよ…せーのっ」

「……3組!!!!」

ピッタリみんなの声が重なった。互いの顔を見回す。そして、全員が同じ組だからということに始めて気付く。

「ええー!! みんな一緒!？」

「まじかよ…」

春華はかなり驚いてるし、海は頭をかきながら呟く。委員長なんか口を開け止まっちゃっている。

僕達は何をしていたかというと、新学年のクラス分けの結果についてだった。そして、その結果は全員が同じクラスだった。

「これから1年間よろしくね」

委員長が頬を赤らめながら呟いた。

「いいんちょ、よろしくっ」

「よろしく」

「よろしくね」

みんなで話しながらクラスに行く。こんなに話さなくても1年間まだまだ話す機会などたくさんあるのにそれでも僕達の会話が途切れる事はなかった。けど、それも教師が来るまでの間ではあったが。

「ほれっお前ら席つけっ席」

めんどくさそうに中年の教師が入ってきた。そしてその教師は軽く挨拶をすると、僕達を朝会に誘導していった。

くだらなく、そして無駄に長い校長の話を聞いた後はクラスに戻り、担任の軽い自己紹介を聞き、今日はそれで終わりだった。

「帰ろ〜」

「おう」

海の言葉で立ち上がる。

「帰りましょっ」

後ろからは春華の声が聞こえた。

「ねえ、いいんちよ〜」

「八城君、な、何っ!？」

前を歩いていた委員長がこちらを振り返る。

「そんなびびんないでよ〜」

「ハハッ、で、八城君、何？」

「いや〜いいんちよ今年もクラス委員長やるの？」

「うんっ! あ、あ、後ね……今年はそのせ、生徒会長もやってみようかと……」

委員長がクラス委員長のみでなく生徒会長をやるという事は僕だけではなく前を歩く海や春華も驚かした。

「えっそうなの？」

「空河さん、すごいね〜」

「いいんちよ、会長もやんの!？すごいじゃん!」

みんなに一齐に話しかけられた委員長は顔を真っ赤にしてしどろもどろとしていた。

「いや…まだ決まった訳じゃないし…その…よければみんな生徒会に入らない？」

「えっ!？」

委員長の更に驚く提案に僕は聞き返してしまった。

「あっいや、いやならいいの……」

「いいわよっ」

「俺もやるっかな」

その提案に春華と海も賛同していた。

「まあ、隼人はやなくてもいいけど」

「ここでやらないと裏切り者みたいじゃんっやりますよっ」

結局僕も春華の挑発にのせられ生徒会をやる事になってしまった。

次の日、学校では委員会を決める事になった。

「ああ、じゃあまずは学級委員長決めて、で後はそいつらに仕切って貰おう。」

教師のめんどくさそうな声が教室に響く。

「やりたい奴はいるか？」

「はい。」

教師が言い終わった瞬間に委員長が手をあげた。

「おお、じゃあ女子は空河で、男子は誰がいるか？」

沈黙が教室を包む。こうなると手を上げたい生徒が余計立候補しにくくなるのは僕の気のせいだろうか？

しかし、その空気をぶった切って手をあげた生徒がいた。

「先生、じ、自分がやります。」

「おお、じゃあ男子の委員長は山崎に頼むな。じゃあ後は2人で仕切ってくれ。」

そう言う教師は山崎の机まで行き、山崎の変わりに席に座ってしまった。

それから2人のうまい仕事ぶり（ほとんどいいんちよが仕切り、山崎が決まった事を黒板に書いていた）で、最後になっていた。

「えっと、最後に生徒会です。これはクラスで立候補してもらう委員会です。これは立候補者がいてもいなくても大丈夫な委員会です。それでもやりたい人はいますか？」

少し高めの委員長の声が僕達に尋ねてきた。

その瞬間、委員長と僕は目があった気がした。

「私がやりますっ」

「俺もやります。」

「はい…」それを見て山崎がお世辞にも上手とは言えない字で僕達3人の名前を書き込んでいった。

「他にいませんか？」

委員長の質問に対しての返答はクラスメートの沈黙だった。すると委員長は近くのチョークを取り、山崎が書いた僕の名前の隣に綺麗な字で自分の名前を付け加えた。

「じゃあ、これで終わります。」

委員長はそう告げ、席に戻って行った。去年もそうだったが委員長は仕事の時はいつもが嘘のようにしつかりと職務をこなし、ミスもほとんどしない。時々仕事をしている委員長が空河恋歌が僕達という時が空河恋歌が分からなくなる。そんな事を考えていると、誰かが話しかけてきた。

「その…八城君ありがとね…」

教師が何かこの後の事を話していたが無視して委員長と話し始める。「いや、あー言ったけど実際は面白そうだからいいよ。だからいいんちょは気にしないでっ」

「あ、ありがとう…」

そこで委員長との会話は終わった。

「じゃあ、今日は終わりだ。あゝ帰るの早いからって遊んでばっかないで勉強しろよ。お前らもう受験生なんだからなゝはいっじゃあ委員長号令！」

教師がそう言うのと委員長はすぐに立ち上がり、号令をかけた。

「起立、礼！」

「はいっじゃあ掃除は1班よろしくな」
そう告げると教師は出て行った。

「隼人、飯行こーぜ。」

後ろから海の声が聞こえた。

「あつ私も…」

春華の声は大きいからどこでも聞こえる。

「や、八城君：私もいいかな?…」

隣からはさっきまでの委員長とは思えない声がした。

「じゃあ、みんなで行かない?」

こうして僕達の高校生活最後の1年間は始まっていった

第15話（後書き）

今回も読んで頂きありがとうございます

今回は自分の中で予定外の事書きまくっちゃいましたね……これがらどっしり……

でわ、早めにこの辺で
次回もぜひ読んで下さい

第16話（前書き）

こんにちは

さあ今回は新一年生が登場します
その子は何なのか！？

あまり期待せずに読んでみて下さいw

第16話

生徒会の会議の初日、委員長は希望通り生徒会長になる事ができた。「今季の生徒会長になった空河恋歌です。3年なので前期しかいられませんが、精一杯立派な会長であるように頑張りたいと思います。まだ未熟者で、皆さんの力をたくさん借りる事になると思いますが、よろしく願います。」

委員長らしい真面目な自己紹介を終えた時、生徒会の生徒は大きな拍手を送っていた。

その日は今季の生徒会の仕事の流れを説明をして終わった。それで分かった事によると僕達3年生の残された仕事は主に体育祭と文化祭の実行と学校の雑務だった。

「ではこれで今季1回目の生徒会の活動を終了します。」

委員長がそういうと、生徒会メンバーは教室から帰っていた。

「恋歌くお疲れくさあ帰りましょく」

「うんっ」

春華がそう言い、みんなで教室を出、また色々話しながら箱に向かった。そして校門を出ようとした時、後ろから声が聞こえた。

「海せんぱあゝい！待ってくださいあゝい！」

そう叫んで、こっちに走ってくる少女がいた。海はその姿を見て、1つ大きな溜め息をついた。

「海…あの子…」

事情を知っているのか春華が海に同情の目を向けながら呟いた。

委員長と僕は全く状況が分からない。ただあの少女が言った言葉が本当なら後輩にあたるのだろう。

「海、あの子は？」

そう僕が聞いた頃には、その少女はもう間近に来ていた。

「ハーハー…こ、こんにちはっ！私海先輩の後輩の小原 優コハラユウですっ
よろしく願いますっ！ハーハー…」

「小原はこっちの駅じゃないだろ？俺達はこっちの駅だからまたな
っ」

海は小原という少女が俺達に自己紹介を終えたらすぐに歩き出した。
「あつ海せんぱあーい…あつ、じゃ、じゃあ、失礼しますっ！」

小原は海の後ろ姿に叫んだけれど、海は行ってしまったので、俺と
春華そして委員長の方を向き

「失礼しますっ」と言って反対方向へテクテクという擬音が合いそ
うな歩き方で行ってしまった。

「春華…あの子は？」

「歩きながら話すわっ」

そう言って歩き出した。そして話し始めた。

「あの子は私達の中学の時の後輩よ。何か海に一目惚れしたのよ。
海に告白したんだけど、海は振ったのよ。それなのにずっと海にく
つついてて、海は流石にはつきり来るなって言っただけでそれで
もずっと離れなくてね…正直あの海をここまで困らせるあんな女の
子は、ほっんと始めて見たわ。」

春華は苦笑いしながら、小原について話した。

「あの子…生徒会に入ってたよな…」

委員長が確認するように春華に尋ねた。

「そうなのよ…もしかしてって思ったら実際そうだったわ。」

そんな話をしていると前を歩いていた海に追い付いた。

「海…小原ちゃんどうすんの？」

海は頭をかきながら、苦笑いして答えた。

「ん…あの子生徒会にもいたしな…ん…」

海が悩んでいると、春華がニヤニヤしながら僕に話しかけてきた。

「それより小原ちゃん胸でつかいでしょ…」

「え、ええ！？な、何で僕？」

いや…確かにかなり大きかったですよ？

あの小動物的な体系に口リフェイス、それにアンバランスなあの胸

……

「隼人、結構見てたわよね？」

春華がさらにニヤニヤしながら言ってきた。

「み、見てないよっ」

必死に否定する僕に委員長がほんとと指で肩を突つついてきた。

「いいんちよ、助けてよ」

「や、八城君は胸が大きい子の方がいいんです…か？」

委員長は顔を赤くしながら聞いてきた。

「ち、違うよっ！ってか何で、いいんちよまで」

その後の昼ご飯の時僕は春華に徹底的にからかわれ、委員長までもが顔を赤くしながら色々聞いてきた。いつもは助けてくれる海も今日は小原という子のこれからの対処を考えるのに必死になっていた。

小原の入学は僕達の学校生活を今まで以上に騒がしく、そして大変なものにした…

第16話（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます

小原はどうでした？

薫さんが最近でてませんね…けど予定では次でしっかり出します
も・ち・ろ・ん小原さん関係で色々ありますけどね

でわ、次回も見えてくれると嬉しいです
失礼します

第17話（前書き）

遅くなってしまうてすいません

言い訳その他諸々はあとがきで書きます
とりあえず物語をどうぞ

第17話

その日、僕はみんなで昼ご飯を食べ終えてそのまますぐに塾に向かった。

塾を終え、家につくと珍しく家の電気がついていた。

「ただいま……」

僕がそう言いながら座って靴を脱いでいると、後ろから最近聞き慣れた声が聞こえた。

「あつ隼人君、おかえり〜」

「えっ!?!」

振り向いた僕の目の前にはエプロン姿の薫さんがいた。

「な、な、何で?」

「今日の朝隼人君のお母さんに会ってね〜とりあえず上がりなよ〜」

「は、はい……じゃあお邪魔します。」

「アハハハ〜ここ隼人君の家だよ〜」

全くこの状況が理解できない僕は自分の家なのに変な事を言っていた。

「隼人君〜お風呂?それともご飯?」

「あつ、じゃあご飯食べますっ」

「じゃあ今用意するね〜」

なぜ薫さんがいるのか全く理解できない僕をよそに僕の前のテーブルの上には薫さんの美味しそうな料理がどんどん用意されていった。

「はいっ召し上がれ。」

「いただきます。」

僕はそう言つて薫さんが用意してくれたご飯を食べ始めた。

「で、薫さん。何で僕の家に?」

「それはねっ」

それから薫さんは話し出した。

「と言う事でした。」

薫さんはコップのお茶を飲み干した後、笑っていた。

薫さんの話によると、今日の朝、僕の母さんに偶然会い、少し話しをしていて、薫さんが今日も薫さんと僕との晩ご飯を2人分作る事を言ったらしい。

（知子おばさんは最近外食が多くなったと薫さんが言ってた…多分僕の母さんと食べているのだろう。）

そしたら母さんが自分の家で作ってくれて良い事を言い、薫さんに家の鍵を渡したという事だった。

「いや、隼人君のお母さんの押しに負けちゃったよ。」

「しつこくなかったですか？」

「全然しつこくなかったよ。後ね料理するだけじゃ悪いから、色々やったのよ。」

「えっ？」

「それでね…あつ隼人君ご飯のおかわりは？」

「あっお願いします。」

薫さんの差し出された右手にそつとお茶碗を渡す。

その時一瞬だけ薫さんの手に僕の手が触れた。

（いつかはちゃんと手を握ってみたいな……）

薫さんはすぐに僕にご飯をよそってきてくれた。

「はい。」

「あつありがとうございます。でも今日は本当にわざわざありがとうございます。」

「いいの、いいの、それと軽くお掃除もしておいたから。」

「えっ!？」

最近の僕は宿題と塾に追われる日々で掃除などには手を回せない状況だった。

「時間が時間だったからあんまり出来なかったけど、今度の休みは私がしっかり綺麗にするわね。」

「えっ！？こ、今度の休みですか！？」

「なんか用事あった？」

「いや…大丈夫ですが…」

「じゃあ決まりねっ」

そんな感じで薫さんが今度の休日に来る事が決まった。

その後薫さんは少し話しをしながら、遠慮する僕を無理矢理座らせ、後片付けを1人でやってくれた。

「じゃあ、勉強頑張つてねーおやすみ」

そう言つて薫さんは帰つて行つた。

だけどその時僕は薫さんが頑張つて元気な”ふり”をしている気がしてならなかった。

薫さんがほとんどの事をやってくれたおかげで僕はいつもより多く勉強できそうだった。

静かに自分の部屋のドアを開けると、最近はお汚くなつてしまつている部屋はとても綺麗に整理整頓されていた。

それを見て、嫌な予感がした。

「大丈夫だよな…」

急いで確認する。今回は僕の嫌な予感はずれていた。

その時僕が確認したのはHな本だ。

春華も良く来ていたので、分かりやすい場所に置いて置かなかった事が幸いしたのかもしれない。

一応僕も思春期なので、女性に全く興味がない訳はない。

机に向かいシャーペンを1本取り出す。

窓から薫さんの部屋かどうかは分からないが灯りが見えた。

その灯りは先程キッチンに立つ薫さんの姿とかぶった。

テーブルからキッチンに誰かが立っている姿を見るのはとても心地よい物という事が分かった。さらに立っていた人が僕の愛している人だったからだろう。

次の休日もまたあの心地よさを味わう事ができるかと思うと自然に手は進んだ。

その日はいつもより少しだけ早く眠りにつけた。

僕はこの時薫さんの異変を一瞬感じただけにすぎなかった…

その結果が数ヶ月後あんな事になるとは全く予想していなかった……

第17話（後書き）

【】の中に書かれている事は出来れば読んで下さい

遅くなってしまつてすいません

言い訳させて下さい。駄目言われてもしますけどw

【遅くなった理由は新作を執筆していました】

ただ編集を何回も繰り返し返していたので、なかなか発表できませんでした。その合間をぬつてこつちを書いていました

いちよう新作は近いうちに新作を投稿する予定です（まだ未完成ですが

【こつちの小説も未完成なのに別のを書いてと思う方もいらつしやると思いますが、新作を書いているのはある大会みたいのに新作を出してみようかと思つているからです】

長い長い言い訳はこのくらいにして本作の話です

今回の話はどうでした？

【ちよつと薫さんが勝手に家に入つてる事に対して、大の大人がと思つかもしれませんがそこは割り切っちゃつて下さい】

もう薫さん通い妻状態wwww

これからどうなるんでしょーね

次の話の予定では休日の前に学校の話を入れようと思います

今回もありがとうございます

次回もぜひ読んでいつて下さい

失礼します

第18話（前書き）

遅くなりました

楽しみにしていってくれた皆様本当にすいませんでした

とりあえずどうぞお読み下さい

第18話

「おっ隼人、おはよう」

「あつ隼人じゃないっおはようっ！」

「あつ海に春華、おはよう。」

通学路で海と春華が前を歩いてた僕に気づき、話しかけてきた。くだらない会話をしていると、時間が過ぎていくのがあつと言う間を感じる。僕達はいつの間にか校門の所まで来ていた。

「ごめん、私、購買で飲み物買ってから、教室行くから、先行つて。」

上履きを履き替えると春華はそう言って購買の方へと走って行ってしまった。

海がなぜかキヨロキヨロと周りを確認してから、僕に聞いてきた。

「で、え〜と……あの隣のお姉さんとはどうなんだよ？」

「薫さんの事？」

「そう。」

「きゅ、急にどうしたの？」

そう聞いた僕に対し、海は鼻の頭をポリポリかきながら海らしくなく言葉を濁しながらこう答えた。

「ん……まあ……その……頼まれ……た……」

海の変な態度を問い詰めてみようかと思ったが、気付いたら教室に着いてしまっていた。さらに僕達に気がついた委員長が話しかけてきた。

「あつ八城君に御堂君おはよう。」

「おっ恋歌ちゃん、おはよう〜」

「いんちょ、おはよう。」

委員長と会った事により、結局海に詳しく話を聞く機会はなくなってしまった。

この時、海に追求していたら少し変わったのだろうか。
時々そう思う事がある。

それでも多分変わる事はなかっただろう。

キンコーンカーンコーン

やっと4時間目終了のチャイムが鳴った。

「隼人！飯早く行くぞっ！」

海は挨拶が終わると急いで、食堂に向かった。僕も弁当を持って、慌てて海を追った。

食堂の席で僕は家で作ってきた弁当を箸でつつきながら、海に尋ねた。

「何であんなに急いだの？」

海は僕の顔をじっと見つめ、そして一つ大きなため息をついてから話し始めた。

「小原だよ。小原…あの子も悪い子じゃないんだが…そのしつこすぎるんだ…まあ良く言つと一途つて言つな…だからあの子だと昼飯を勝手に作つてきそうだから…」

海は真顔で話しながら僕の弁当箱に人参をどんどんいれてった。

「モテるのも大変なんだね。」

海がいれた全く人参の味がしない人参をつまみながら笑いながら答えた。

「隼人…お前も結構人気あんぞ…」

「えっ！？ほんと!？」

僕は薫さんの事が好きだ。しかし誰かが僕の事好きでいてくれるのはその人には悪いがやっぱり嬉しい。

海は箸を僕の方に向けると真顔で話し始めた。

「やっぱり隼人は鈍いなあ…薫さんもいいが、少しは自分の周りも

見てみるって……」

海はゆつくりと僕に向けていた箸を下ろし、僕の弁当箱から冷凍物の唐揚げを一個持っていった。

それから後はくだらない会話をしていくうちに昼休みは過ぎていった。学校の後はそのまま塾に行った。

「明日、薫さん来るのか……」

塾の帰り、人がほとんどいない電車に揺られながら気付かぬうちに自分自身でも聞き取る事ができないくらい小さな声で呟っていた。

多分、薫さんは僕への恋愛感情なんかこれっぽっちもないと思う年頃によくあると言う年上への憧れなのかもしれない

でも憧れだろうが何だろうが関係ない

僕はただ、単純に薫さんが好きただけだ

例え薫さんが僕の事を微塵も意識していなくても……

それでも……

それでも……

僕は……

第18話（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます

今回のタイトルは海の”言葉”、隼人の”気持ち”を意味しています
それ以外には今までの隼人、薫、恋歌、小原の”言葉”そして薫、
恋歌、小原、今までしっかりと書かれていない春華、海の”気持ち
”の意味もあります

ただみんなの言葉や気持ちは今回の話では書かれていないし、まだ
書いていません

この話から自分なりに少しずつみんなの思いを書いていきたいと思
います

最近は読んでくれている人も少しずつ増えていて、最初の方に人が
いないとずっとしよぼんとしていた自分が懐かしいです

これからは本編を進めると同時に今までの物語を再編集して今まで
以上にたくさんの人達が読みやすいような話にしていきたいと思っ
ています

新しい話も書いていて、そちらの方を少し優先的に進めていくので、
この【夏の薫り】は今までより執筆スピードが遅れてしまうと思い
ます

それでもせめてひと月に一話は投稿する予定ですので、気長にお待
ち下さい

今日は長々とすいませんでした

そしてここまで読んでいただき本当にありがとうございます
これからもしっかりと頑張って執筆作業に取り組んでいきたいと思
います

あじがとにいじれこ#あす

第19話（前書き）

十九話の『珈琲の香りに満たされた部屋』を投稿します
隼人の心情が描かれる作品です

ぜひお読み下さい

第19話

ピ…

ピピッ…

ピピッ…ピピッ…

「うーん…」

重い体をベッドから起こす。まだ寝ていたいと体は訴えているが、その通りにする訳にはいかない。土曜日の今日、塾は休みになっている。だからといって勉強は休めない。

僕はゆつくりと1階に下りて行った。

顔を洗い、さっぱりしてキッチンに向かう。

僕はまずパンをトースターにセットし、コップにインスタントコーヒーを少し多めにいれる。

少し多めにいれて濃くする。

これがコーヒーが好きな僕の小さなこだわりだ。

「新しいの買わなきゃ…」

今の一杯で丁度インスタントコーヒーのビンは空っぽになった。

バターをフライパンにほんのちよびつとだけいれ、火を点けた。

ベーコンを1枚取り出し、フライパンで焼き始める。

ベーコンはベーコン自体から油が出るから油をそんなにひかなくていいのだ。むしろ油はいらないくらいだ。

ベーコンはカリカリしてない方が好きな僕は軽く焼いて、焼きあがったパンにのせる。

次に僕はレタスを水で丁寧洗い、水を良くきってから手で数枚千

切ってパンの上にのせた。そして僕はコーヒーのためにやかんを火にかけた。

その間に朝御飯のサンドイッチをテーブルに置く。

「よしっ…」

僕はキッチンに戻り、壁に寄りかかりながら沸騰するのを待った。

僕は目をゆつくりと閉じた。僕のまぶたの裏に浮かんでくるのは薫さんだった。

僕はふと思う。

薫さんは僕を認めてくれるのか…

薫さんは僕を見てくれるのか…

薫さんは僕を好きになってくれるのか…

僕はその時自分自身の気持ちに余りに一方通行だという事に気づいた。

「僕は…僕は…」

不安に押しつぶされそうになった僕の思考は沸騰しだしたやかんによって中断された。

ゆつくりとコップに注ぎながら僕は考えた。

最初から一方通行の恋だったじゃないか…

今更諦めてどうするんだ…

今は『僕は薫さんの事が好き』という事でいい。

僕が薫さんが好きという事に自信を持っていないと、薫さんが僕を見ってくれるはずがない。

「うん、それでいいや。」

僕は半ば無理矢理自分自身を納得させた。

先程注いだコップからは湯気と共に香りが漂っていた。

コーヒーの香りが少しずつ僕を満たしていく。

本当はコーヒーミルなどの本格的な機械がほしい。あればきつとも

つと良い香りが漂ってくるのだらう。

そんな事を考えながら僕はテーブルに戻り、食べ始めた。

「ご馳走様でした。さて…やる事やるか…」

僕は食器を洗ってから、たまってきた洗濯物を洗いに洗濯機へ向かった。

そしてこの後は勉強といつもだったら特に代わり映えのない休日が始まる。

けれど今日は違う。

いつもと同じような休日ではない。なるはずがない。

なぜなら今日は僕の片思いの人が来てくれるからだ。

僕の大切な人

近くにいるけれど届かない人

コーヒーの香りに満たされた部屋

僕はそつと窓を開けた。

春の薫りを含んだ風が僕の頬を撫でていった。

僕の…

僕の…大切な1日が始まった。

第19話（後書き）

今回も呼んで頂きありがとうございます

今更出てきた隼人の珈琲好き

もちろん作者の自分から継承させましたw

自分もコーヒーマイルなどの機械がまじでほしいんですよw

ちなみに自分はブラック派ですよw

あの香り、苦味最高ですね

まあ話が逸れましたが、今回は隼人が自分自身の薫への気持ちが一方的な物に今更ながらも気付きます

片思いも恋愛だと思いますが、その部分を何も意識していなかった隼人はふと相手からの気持ちに対して考えます

皆さんもそのような気持ちになった事はありませんか？

今までの話で描かれている薫から隼人への気持ちは恋慕の情から外れています

その気持ちも今回はやかんによってw遮られますが、多分これからしつこくまとわりついてくる感情になるでしょう

今回の後書きは長くなってしまいました、すいませんでした

次回はいよいよ薫が家にきます

投稿予定は来月なので決して怒らず、殺気なども送らず、自分を応援してくれるとうれしいです

次話も楽しみにしていて下さい

第20話（前書き）

こんにちは

第二十話を投稿します

どうぞ読んでいって下さい

第20話

ピンポン

僕以外誰もいない家にチャイムが鳴り響いた。

「あつ薫さんだ。」

僕は階下へと急ぎ、ドアを開けた。

「お届け物です。すいません、サイン頂けますか？」

「あ、はい。」

そこにいたのは薫さんではなく、宅配便のおじさんだった。僕は差し出された紙にその場でサインを書いて、返そうとした。その時、僕の目に門扉の所にいる薫さんの姿が飛び込んできた。目が合うと薫さんは綺麗な口元をゆっくりと動かした。

「はやく。」

（隼人って言うてるようにも見えるよ……）

僕はぺこりと頭を下げながら、差し出された紙を宅配便のおじさんへと返し、荷物を受け取った。

「ありがとうございます。」

そう言って笑顔で帰っていった。おじさんがトラックに乗り始めると薫さんはスーッと僕の前までやって来た。

「おはよう、隼人君。」

「薫さん、おはようございます。どうぞ。」

薫さんが家へと入れるように僕は体をどかした。

「お邪魔します。」

「じゃあご飯できたら呼ぶからそれまで勉強頑張ってね。」

「分かりました。じゃあお願いします。」

「おねーさんに任せなさい。」

薫さんはそう言つと、胸をはった。僕は軽く笑い

「じゃあ、薫さんに任せます」と言つて自分の部屋へと上がって行

った。

階下では

「頑張つてねーさあて私も頑張りますかつ」と薫さんの言った言葉が誰もいない家で少し響いていた。

トントント

軽い音が僕の部屋に響いた。

「はい。」

「失礼しまゝす。」

薫さんはそう言つと、ひょいと頭だけを部屋に入れて中を確認してから僕の部屋へと入ってきた。

「場所とか分からない物がありました？」

僕が椅子から立ち上がろうとしたのを薫さんは僕の両肩に手をやって制した。

「いいの、いいの。それより隼人くん熱くない？大丈夫？勉強し過ぎじゃない？」

「だ、大丈夫ですよ…」

僕が振り向くと薫さんは僕のベッドに腰を下ろしていた。

「隼人君の部屋広いね」

「そ、そうですね？」

「そうよーうらやましいじゃないっ」

「か、薫さん……」

僕は椅子ごと薫さんの方へとゆっくりと向き直った。

「どうしたの？」

薫さんの笑顔が眩しい

たった一言

時計の音がうるさい

『好き』という言葉

頭が重い

やけに心臓の音が大きい

薫さんへの気持ち

なんか喉がカラカラだ

部屋がゆっくりと歪み始める。全てがゆっくりと見える。

僕の頭ではゆっくりと、本当にゆっくりと椅子から落ちていった。

「隼人君！！！！！！！！！！」

薫さんの叫んだ声がやけに近くで聞こえる。

薄れていく中、僕の目に映ったのは薫さんの青ざめた顔だった。

「薫さん…顔色悪いですよ…」

僕がつぶやいた声は声になっていなかった。

——薫さん、笑っていて下さいよ——

ここで僕の思考はゆっくりと閉じられた。

頭がガンガンする。

急に僕の額に冷たい何かが触れた。

「んっ……」

ゆっくり開いたまぶたに光が降り注いできた。

「あっ！隼人君、大丈夫？」

現状が未だに把握できないが、僕は横になっていて隣に薫さんがい

る事だけは理解できた。

ゆっくり、本当にゆっくりと思考が僕の頭の中で開いていく。

そう…確か僕は…薫さんと一緒にいて…

それで…

それで…

倒れたんだ…

「か、薫さん。」

慌てて体を起こそうとしたが、僕の体はなかなか動こうとしてくれなかった。

動かそうとしていた事が分かったのか、薫さんはゆっくりと手で僕を制し

「まだ起こそうとしちゃダメよ。」と言ってきた。

「ここは？」

周りを見回し、やっとこの場が自分の家の部屋じゃない事を理解した。

「医大よ。慌ててたから救急車呼んじやったの。」

「隼人！！」

急に誰かが僕の名前を叫んだ。だるい頭を動かそうとしていた時に僕の視界に母さんの顔が飛び込んできた。

「あつ…母さん…」

僕がそう呟やくとほぼ同時に中年の小太りの医者と島崎おばさんが入ってきた。

まだぼーとした頭で何とか理解できたのは僕が倒れたのは疲れと風邪が重なったからだだったって事だけだった。

それからそのまま病室で少し休んでから僕は薫さんと母さん、そしておばさんに連れられ、タクシーによって帰った。
タクシーの中で薫さんは母さんに平謝りしていた。

僕が

「薫さんは悪くないですよ。」と言うと、母さんも薫さんは全く悪くないという内容の事を言っていた。

家に帰ると、僕はまっすぐに部屋に連れて行かれ、ベッドに横になった。

海、春華に明日学校を休む内容のメールをゆっくりと送信した。

「ふう〜」

今日は薫さんがわざわざ来てくれたのに大変な事になってしまった。ベッドで横になっていると、頭が楽になり、色々と考えていた。しかし、実際はいつの間にか深い眠りへと落ちていった。

この時、携帯にメールが届いていた事を知るのは明日の朝だった

第20話（後書き）

早い物でもう二十話まで来てしまいました

正直、こんなにこの物語が続くとは思っていませんでした。しかし書いていくうちにどんどん新しいネタが浮かんでくるのですよ

本当に……

これやったら面白いだろうな

隼人にこうさせてみよう

薫にこう言わせてみよう

とかですね

多分、この物語はまだある程度は続くと思います

それまで隼人や薫を含めた登場人物、そして作者「剣一」を暖かい目で見てやって下さい
よろしく願います

何か、今回の後書きはちゃんとした人が書いたみたいになってるw

www

第21話（前書き）

遅くなつてしまいました但明けておめでとうございす

今年も本作、それ以外の作品そして、作者共々宜しく願ひしす

大変遅くなつてしまい本当に申し訳ありません

良ければ読んでいって下さい

第21話

「ん…」

時計を見ると、だいたい9時を過ぎた辺りだった。

僕はベッドから起き上がり、1つ伸びをした。そして、昨日よりも楽になった体で階下へと向かった。

「あら？起きて大丈夫なの？」

僕がリビングに顔を出すと、そこには母さんが新聞を読みながらゆっくりしていた。

「うん。それより母さん、仕事は？」

「休んだに決まってるでしょ。隼人、それより何か食べる？」

「あっ…うん。」

母さんは立ち上がるとそのままキッチンへと向かった。僕は近くの椅子にとりあえず腰を下ろした。

「出来たわよ。」

母さんが運んできた朝ご飯は少し柔らかめのご飯に豆腐の味噌汁だった。

「いただきます。」

「はい。」

「味噌汁、味大丈夫？」

「うん、美味しいよ。」

僕がそう言つと母さんは安心したように息を漏らし、笑顔で答えた。

「最近は隼人の方が料理上手だから隼人にそう言ってくれたなら母さんもまだまだ安心ね。」

そう言つて母さんは廊下の方へと向かっていった。

「あつ洗い物は流しに置いていいから、ゆっくり休みなさいよ。」

「はい。」

「ご馳走様でした、つと。」

僕は食器を流しに置き、水を注いでおいた。それからコップを取り出し、水を半分程入れてからそれを持って自分の部屋へと向かった。

まず昨日処方された錠剤を飲んでから携帯を開いた。

携帯を開くとメールが数件着ていた。

春華、海、薫さんそして、委員長からだった。僕は1人1人にメールを返信し、少し横になった。体調は楽になったとは言え、まだ完全と言う訳ではなく、だるさが少しだけ残っていた。

「隼人」

「んあ…な、何？」

少し寝てしまっていた僕は母さんの言葉によって起こされた。

「お昼ご飯うどんがいい？」

「うん。」

「じゃあできたら呼ぶわね。」

母さんはそう言うのと小気味よい音をたてて、1階に下りていった。再び携帯を開くと海からメールが着ていた。

「ノート必要だろ？とりあえず今日渡しにだけ行くよ

ポストにでもいれとくから

お大事に」

僕は時計を確認してみた。まだ海達が来るまでには時間があるだろう。僕は軽く着替え、1階に下りていった。

母さんが作った煮込みうどんを食べ終えると、また部屋へと上がって行った。

僕はシャーペンを置いて、時計を確認した。

いつの間にか夕方と呼べる時間帯になっていた。僕の前の参考書は先程より何ページも進んでいた。

西日が部屋にある観葉植物を照らしていた。観葉植物からはすつと影が伸びていた。綺麗な橙色の影が伸びていた。

僕の部屋の中では言葉で表現できないいつもとは違った空気が僕自身を包み込んでいた。

参考書の問題をゆつくりと目で追う。先の見えない不安を無機質な文字が更に襲ってきた。

僕はゆつくりと息を吐いてから、珈琲を一口飲んだ。

自分で自分自身に言い聞かせる。

（慌てたって、嘆いたって変わらない…1つずつ1つずつ進んでいくんだ…）

カツ

手で回していたシャーペンが僕の手から滑り落ち、机に当たって床に落ちていった。

「あつ」

僕がシャーペンを拾おうとしやがんだ時、チャイムが鳴った。

「はい。」

階下でガチャツというドアが開けられた音がした。

「あら、御堂君に春ちゃんじゃない。えと…この綺麗な女の子は？」

母さんの言葉が聞こえた。

「こんにちは、私、八城君と同じクラスの空河恋歌です。宜しくお願ひします。それで今日の授業のノートを持って来たのですが…八城君の具合は大丈夫ですか？」

僕はそんな言葉を聞きながら、ゆつくりと1階に向かった。

「おはよう。」

僕がひよつこりと顔を出すと、海、春華、委員長の顔が変わった。母さんは僕が来たのを見ると、部屋の中へと戻って行った。

「隼人っ！」

「隼人、大丈夫なの!？」

「あつ八城君っ！」

「まあかなり楽になったよ。わざわざありがとね。」

「じゃあ、これ。」

と、委員長が僕にノートを渡してくれた。

「ありがと。」

軽く雑談をして、少し雑談が止まった時に

「そろそろ帰るが、さっさと治せよー」

「あんまり長居するのも悪いし、帰るわね。」と海と春華が言ってきた。

「おう。ありがとね。」

僕がそう答えると、2人は外に出て行った。

「八城君…」

委員長がちよこちよこと小さな動作で手招きをした。

「ん？」

僕は少し委員長に耳を近付けた。その瞬間

「早く治してね。」

そんな言葉の後に僕の頬に何かが優しく触れた。

「え！？」

委員長は真っ赤に染めた顔で1回につこりと笑うと、少し照れた笑いに表情を変化させながら小さく手を振って、帰って行った。

まだ先程の感触が残る頬を僕はそっとなぞってみた。

小さな温もり

柔らかい温もり

空の薫りを残し、君は帰って行った

第21話（後書き）

今回もお読みいただき本当にありがとうございます

クリスマス用の作品を終え、ちよつと安心してたらあれよあれよと言う間に新年を迎えてしまい、それから急いで執筆作業を始めたので今頃投稿という形になってしまいました

これからは少しずつ執筆ペースを昔のものへと戻し、さらに少しでも多く作品を投稿出来るように頑張っていきたいと思います

今更でしたが、今回はどうでした？

ちよつと駆け足に見えるかもしれませんが、それは恋歌の少し焦った様子が描きたかったからです

一方、隼人はこれから先の事と薫の事で手一杯

今回の恋歌の行動により、隼人がどうなっていくか、作者自身もやはりまだ悩んでいる所ですw

では、次話でまた…

第22話（前書き）

二十二話を投稿します

暇があつたら読んでいって下さい

第22話

「海、おはよう。」

僕は学校の冷たい椅子に腰を下ろした。

「おつす。もう大丈夫なのか？」

「お陰様でね。」

「あんま無理すんなよ。」

海が僕に心配そうな表情を向けた。

「推薦取れそうな奴とは違うんだよー」

「良いだろー」

「このやろー」

2人でじゃれあっていたら後ろから話しかけられた。

「あんた達はいつも馬鹿ばかりやってー」

「あつ春華おはよう」

「春華、おはよう」

春華は1つ溜め息をつくとき、おはよう、と笑顔で答えた。

そこへ委員長もやって来た。

「恋歌、おはよう」

「空河さんおはよう」

「お、おはよ…う。」

あの日の玄関での記憶が僕の中で蘇ってきた。

「みんな、おはよう。」

春華が思い出したように急に僕に話し掛けてきた。

「隼人、大丈夫になったの？」

「や、八城君、大丈夫？」

「うん、まあ何とか…」

「無理すんじゃないわよー」

春華はトントツと僕の肩を叩くと、いつもの元気な笑顔を振りまきながら自分の席の方へと歩いて行った。

「空河さんどしたの？顔赤いよ。」

海が委員長の顔を覗き込んだ。

「だ、大丈夫。」

委員長はそう言っ慌てて顔を反らせると、自分の机へと向かって行った。

「なあ…隼人…」

海が小声で話し掛けてきた。

「何？」

「空河さんと何かあった？」

「…いや、何もないよ。」

普通に答えようとしたのに少し間が開いてしまった。海はそれ以上追及せずに、ふーっとため息を着くと優しい笑みを浮かべながら僕の肩を2度軽く叩いただけだった。

「終わったー隼人ー帰ろ…」

「八城君、ちよっといい…？」

伸びをしている僕へ声を掛けてきた海の言葉を委員長が遮った。

「うん。」

海は僕と委員長の顔を見比べると

「春華、帰ろー」と言いながら春華の方へと向かって行った。

「時間、大丈夫？」

委員長が少し緊張した面持ちで尋ねてきた。

「今日は別に大丈夫だよ。」

「じゃあ、先生に呼ばれてるから…ちよっとだけ待っててもらって大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。」

「私が八城君に用あるのに本当にごめんね…」

「大丈夫だから気にしなくて良いつて。」

委員長は申し訳なさそうに謝りながら教室を出て行った。

僕は椅子に座り、机に突っ伏した。

「やっぱ疲れた…」

その瞬間、僕は急激に睡魔に襲われた。底無しの沼に沈んでいくように僕は夢の世界へと深く、深く沈んでいった。

「ッ!」

急に目覚めた僕は顔をハツと上げた。僕の視界に真っ先に飛び込んできたのは委員長だった。

「あつ、や、八城君おはよ。」

「ごめん…寝ちゃってた…起こしてくれればいいのに…」
教室の中はいつの間にか綺麗な橙色に染められていた。

「八城君、なんか熟睡してたみたいだったから起こすの悪くなっちゃって…」

委員長がいたずらがバレた子供のようにテヘツと舌を少し出した。

「ふう…」

委員長は1つ息を吐き出すと、スツと立ち上がり、窓の方へと歩いて行った。

「八城君…」

「ん？」

委員長の影が夕日によって長く伸び、僕の影と重なっていた。

「この間はごめん…」

あの時の温もりが体の中に蘇る。

「べ、別に気にしてないから謝らなくても…大…丈夫。」

僕は徐々に体が火照っていくのが分かった。

「あのね…」

「うん…」

「…」

時計の針が少し動く。

「フフ…やっぱり今度にするっ」

「え？」

「帰りましょ？」

橙色に染まつた教室

止まらぬ時計は戻らぬ日々を刻み
君の言葉の真意が分からなくて

2人の影はもう交わっていなかった

第22話（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

今回はどうでしたかねー？

隼人君は空河の気持ちに気付いているんでしょうか…

んーでも今までの隼人だと気付いてなさそう（´・ω・`）

空河が可哀想だ…

一話とか読むと文章が安定していない事をひしひしと感じます

ある程度落ち着いたらもう一回修正いれよw

なかなか登場したのにいかせてあげてないキャラも徐々に登場させたいのですが…まあ自分の力不足のせいですが…

常に実力不足を感じている駄目な作者に自分の恋一直線の駄目な主人公ですが、今後とも宜しくお願いします

第23話（前書き）

遅くなりましたが、二十三話を投稿します
宜しければ読んでいって下さい

第23話

ガチャリ

「隼人君、おかえりー」

玄関を開けると、聞き慣れた声が僕を迎えてくれた。

「薫さん、こんばんはです。」

鞆を起きながら、伸びを一つした。

「だから、隼人君の家何だからただいまで良いじゃない。もー」

薫さんはテーブルに料理を運びながら、頬を少し膨らました。

「そうでしたね…た、ただいま。」

僕も料理を運ぶために薫さんの隣に並んだ。

「いただきます。」

2人ほぼ同時に言うのと、僕は炊き込みご飯を口に運んだ。

「うわっ美味しい！」

食わずに僕の様子を見ていた薫さんの眼がキラリと輝いた。

「そんなに美味しい？」

薫さんはそう言うのと、自分も一口食べた。

「あっ本当だ…」

薫さんは口に手を当て、呆気にとられていた。

「こんなに美味しく出来るとは思ってたわ…」

「レシピ教えて下さいよ。」

僕はロールキャベツにも箸を伸ばした。

「なーいしょっ」

ふふ、と薫さんは笑った。

「あっそのロールキャベツは春キャベツを使ってみたんだよ。味の方はどうかな？」

僕は丁寧に巻かれたロールキャベツにかぶりついた。
柔らかいながらも食感のあるキャベツを噛んだ瞬間、中に詰められ

てあた肉汁が僕の口の中に一気に広がった。

「これもめっちゃ美味しいですよ！」

「旬の物使っと、何か気合いが入っちゃうのよねー」

「普段から美味しいですよ。」

「おだてたって何もないわよ？」

「美味しいご飯がありますよ？」

僕は食事を続けながら答えた。

「もうそんな事言わないの。」

薫さんは笑顔でそう言っと、薫さん自身も食事を再開しだした。

「ふーっ本当に美味しかったです。」

僕達は食後に温かいお茶を飲んでいた。

「ありがと。そう言えば隼人君はゴールデンウィークはどうするの？」

薫さんはふーふーと自分のお茶を冷ましながら尋ねてきた。

「多分勉強漬けになってますよー」

僕は苦笑いしながら答えた。

「あれ？聞いてないの？」

「え？」

僕はまじまじと薫さんを見つめてしまった。

「おばさん達また旅行に行くみたいな事言ってたわよ。」

「き、聞いてないですね……」

苦笑いで答えた僕

不思議そうな笑顔のあなた

―あの時

―あの日

―僕は知らなかった―

第23話（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます

最近はなかなか忙しい日々が続き、あまり書けませんでした

正直言うと、今までの話を自分自身がもう少し納得いくように編集したいのですが、それもあまり進んでないです

自分の中では最終話の直前には前半部分の編集が終わっている状態を目標としています

久々の後書きなんか上手く書けませんでしたw

これからも頑張って執筆していくのでこれからも宜しくお願いします
毎日覗いてくれる読者の皆さんがいる事は作者としてもとても嬉しい事です

本当にこれからも宜しくお願いします

第24話（前書き）

更新が遅くなってしまいすみませんでした
24話を投稿します

久々に長めのお話です
ぜひ読んでみて下さい

第24話

「ねえ、母さん。」

僕は晩御飯を食べている母さんに話し掛けた。

「どうしたの？」

「ゴールデンウィークどっか旅行行くの？」

「あら、言ってなかった？」

僕は母さんのそのすっかり忘れていた様子に小さく溜め息をついた。

「全く聞いてないよ。別に行く気はないけどちゃんと教えてよ……」

「ごめんね。すっかり言った気でいたわ……。」

「まあ別に良いけどさ。今回はどのくらい？」

「四泊五日くらいしちゃうかな……って考えてるのよ。どうかな？」

言い忘れていた事を気にしているのか言い終わった後、母さんは僕の顔をチラリと見た。

「うん、良いんじゃない？まあゆっくりして、疲れ取ってきなよ。」

「ありがとうね、隼人。じゃあまた留守番よろしく頼むわね。」

「分かったよ。」

僕はそう答えると、部屋に戻って、再び勉強に取り掛かった。

ゴールデンウィークの初日、天気は申し分ないほど晴れ渡っていた。

「じゃあ行つて来るわねー」

「留守番よろしくな。」

僕は出発する両親とおばさんの見送りに玄関まで出ていた。そしてそこには薫さんも来ていた。

「薫さん、色々とよろしくお願いしますね。」

「はい、任せて下さい！」

「じゃあ行つてきまーす。」

母さん達はそう言つと、父さんの車に乗り込み、出発した。

「あつ、隼人君。」

「はい？」

薫さんは車が見えなくなると、振っていた手を下ろしながら笑顔で話し掛けてきた。

「あのね、おばさん達と話して決まったんだけど、旅行の間は隼人君の家に私が泊まる事になったからよろしくね。」

「え？」

「家事だつて私がした方が隼人君の負担にならないだろうし、それにまた倒れられちゃったら困るしね。じゃあ荷物だけ持って来るから待っててねー」

薫さんはそう僕に告げると、走って戻って行つた。

僕の頭の中に母さんのある言葉が思い浮かんだ。

『四泊五日くらいしちやおうかな』

「四泊…五日も?…」

僕は薫さんが荷物を持って、再びやって来るまで、驚きで動く事が出来なかった。

「じゃあ、隼人君、改めて短い間だけど、五日間よろしくね。」

「は、はい…」

今、僕達はリビングでお茶を啜りながら向き合っていた。そして、僕がちゃんと理解をするために、もう一度薫さんが説明してくれたところだった。

「とりあえず、家事全般は私に任せてくれて大丈夫よ。だから隼人君は勉強頑張つてね。だからって、倒れるまでし過ぎるのは駄目だからねー」

「も、もう倒れませんって…」

「ならよろしー」

苦笑いをする僕の頭をポンポンと撫でると

「ほーら、後片付けは私がやるからちゃちゃと勉強してきなさい。

」と、薫さんは僕を部屋へと追い返した。

僕は部屋へ入ると、すぐに勉強を開始した。

カチツカチツ

時計の音が響く―

カツカツ

ペンの音が響く―

「よし…次は単語だ。」

いつの間にか窓の外は陽が落ちかけていた。僕は問題集を閉じ、元に戻してから、単語帳を取り出した。と、ちょうどその時、ドアの向こうから声が聞こえた。

「隼人君、ちよつと今から晩御飯の買い物行つて来るから、鍵閉めてもらつても良いかしら？」

僕はほんの少し前に取り出した単語帳を見ると、僕は立ち上がった。

「僕も一緒に行きますよ。」

僕が上着を羽織つて、部屋から出ると、薫さんは少し驚いていた。

「でも、勉強は？」

「一日中机に向かつていたら気が狂っちゃいますよ。気晴らしです。」

薫さんは少し僕の顔を見て、考えると笑顔でこう言った。

「じゃあ一緒に行きましょうっか」

鍵を閉めて、歩き出す。

「今日の晩御飯は何ですか？」

僕がそう尋ねると、薫さんは苦笑いしながら答えた。

「何しようかまだ決まってるのよね」隼人君は何食べたい？」

「ん」何でも良いですよ。」

「うーん…まあ見てから決めましょうか。」
「そうですね。」

くだらない話をしながら歩いていると、目的地であるスーパーにすぐに到着した。

僕がカゴを持ち、二人でゆつくりと歩き始めた。

「野菜は結構あったのよね…」

「だったら簡単に野菜炒めにするのはどうです？」

「隼人君はそれでも良い？」

「はい。」

「じゃあそうしましょっか。」

そう言っていると薫さんと僕は青果売場の方へと歩き始めた。

少少だけ野菜を選んでカゴにいれ、今度は豚肉を選び、レジへと向かった。

「私が持つよ？」

帰り道で僕の隣を歩く薫さんが僕が持つレジ袋を見てきた。

「これくらい大丈夫ですって。」

あまり購入しなかったため、レジ袋は1つですんでいた。

「んー…悪いわよ…」

薫さんは口を尖らせて呟いた。

「じゃあ変わりにめちゃくちゃ美味しく作って下さいね。」

「もう…隼人君が作った方が美味しいじゃない。」

「そんな事ないですよ。薫さんの方が断絶上手ですよ。」

そんな会話をしていると、すぐに家に到着した。

「後は私がやつとくわよ。」

買ってきた物を冷蔵庫に入れていた僕は振り向いた。

「じゃあお願いします。」

そう言って僕は薫さんに残りを渡すと、部屋へと戻って行った。

「出来たら呼ぶわね。」

階段を上る僕の背中にそんな薫さんの言葉が届いた。
僕は

「はい。」と返事をして、部屋へと入った。

「どう?」

薫さんが見つめる中、僕は飲み込んだ後、思ったままの言葉で答えた。

「すごく美味しいです。」

「良かった。」

薫さんの作った料理はやっぱりととても美味しかった。

「受験は大変でしょ?」

「まあ…んーでも受験する人はみんな同じ思いしてる訳ですし…そう考えると、あまり辛くないですね。」

「そうよねえ…」

私なんて附属高だったから分らないのよね…」

この時、僕は自分が薫さんの事について全くと言っていい程、何も知らないという事に気が付いた。

「附属だったんですか…」

薫さんの学生時代ってどんな感じでした?」

「…学生時代か。」

その時の薫さんの顔にはとても悲しく、切なく、心の弱い部分全てが表れたような、そんな表情だった。しかし、そんな表情に対して僕はとても綺麗だと感じていた。

いや、実際僕以外の誰が見ても見惚れていただろう。

その日、僕は学生時代の薫さんについてたくさん知る事が出来た。三年間、学級長をしていた事、仲の良い女子三人といつもいた事、進路では母親と喧嘩した事など本当にたくさんの事を話してくれた。それでも僕には何が薫さんのあの表情を作る引き金になったのか理解する事は最後まで出来なかった。

「あら…何か凄く話しちゃったわね。」

後片付けは私がやっておくから、隼人君は先にお風呂にでも入って来ちゃいなさいよ。」

「薰さん……」

僕の頭は別の事を考えていた。

「なあに？」

食器を流しに運んでいた薰さんが振り向く。

僕はゆっくり呟く。

「……か、片付け僕も手伝いますよ。」

僕は一言、僕の気持ちを告げる事は出来なかった。

「じゃあ……ちよつとだけお願いね。」

そう答えた薰さんの表情は先程までのあの表情の影は微塵もなかった。

第24話（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます

今更ですが月日は経つのは早い物で、いつの間にか1年半ほど経過しています

年上だった隼人もいつの間にか自分と同じ年になり、時間軸では現実の方が先に進んでる事になっています（夏の薫りの24話最後の部分がGW中に対し、現実は5月末）

1年半も経過したのにまだ24話しか書いていない自分ですが、日々確認してくれている読者の方々がいると言う事はとても励みになります

少しずつ完結に向かっていっているこの話を自分の満足のいく形で完成させ、皆さんに読んでいただけるようにこれからも遅筆ながらも頑張っていきたいと思っているので宜しく願います

第25話（前書き）

第25話を投稿します

よろしければ読んでいって下さい

第25話

「う、うん…」

急に目が覚めた僕は時計を確認する。

デジタル時計には午前七時半と映し出されていた。

休みの日はもう少し寝ているため、二度寝をしようと思いを閉じたが、完全に目が覚めているため、眠りに付く事は出来なかった。

「顔洗いに行くか…」

寝る事を諦めた僕はベッドから立ち上がると、部屋を出た。

「あら、隼人君、おはよう。

早起きねーもうちよつとで朝ご飯出来るから待ってねー」

階下で待っていたのはエプロン姿でキッチンに立つ薫さんだった。

「あ、お、おはようございます。」

僕はそう言つて、洗面台へと向かった。

顔を洗い、寝癖でボサボサの頭を洗って直した僕が再びリビングに顔を出した時にはテーブルの上には美味しそうな朝食が出来ていた。椅子に座つて改めてテーブルを見る。ご飯にお味噌汁、鰯の干物、出汁巻き玉子にほうれん草のお浸し、納豆と言った和食が綺麗に並べられていた。

「うわぁー…」

す、すごく美味しそう…」

僕は感動して上手く言葉が出なかった。

「もう、そんなびっくりした顔しないでよ」

ほら、食べましょ？」

薫さんはそう言つと、いただきます、と食べ始めた。

僕もすぐに

「いただきます」と言つてから、まずご飯を一口頬張った。

少し咀嚼してから、味噌汁も口に含む。口の中にすぐさま出汁の良い風味が広がった。

「めっちゃ美味しい…」

僕の口から自然に言葉が漏れた。

「本当？」

「はい。化学調味料じゃこの風味は出せませんよ。」

僕がそう言つと、薫さんは少し驚いた顔に変わったが、すぐに納得した顔になった。

「やっぱり隼人君はちゃんと作った出汁が分かるのね。手間暇かけて良かった。」

「こんなに美味しかったら誰だつて分かりますよ。」

薫さんが作った朝食は僕が作るより断然美味しかったので僕はすぐに食べ終わってしまった。

「隼人君は今日、どこか出掛けるの？」食べ終わって少しゆっくりとしていると薫さんが聞いてきた。

「いえ、今日も家で勉強ですね。」

「そっか。連休なのに大変ね…」

「確かに大変ですけど、ある程度の大学には入りたいですからね。」

「そうだよな。隼人君、頑張つてね。」

薫さんはファイト、と両腕でガッツポーズを作り、応援してくれた。僕もいい、と右手でガッツポーズをしてから食器を流しに運んでそのまま部屋へと戻った。

「隼人君、お昼御飯出来たわよ。」

部屋の外から薫さんの声が聞こえた。

「はい。今行きます。」

ノートと問題集を閉じ、シャープンを置いて僕は部屋のドアを開けた。

昼食は焼きそばだった。

食べ終わると晩御飯の買い出しに向かった。昨日は少し遅かったた

め、あまり買わなかったからである。

「何か連続で悪いわねえ……」

そう言った薫さんは僕に対して心から悪いと思っているような表情をしていた。

「いえいえ……家事とかやってくれるだけでもすごく助かりますよ。それより今日の晩御飯は何にするんですか？」

「ふふふ……秘密よ。」

薫さんはまあ任せなさい、とニコツと笑った。

作る物が決まっていると、買う物はすぐ選ばれていった。

僕が持つカゴには数種類の野菜、豚肉の肩ロースが入れた。

「隼人君、卵はあったかしら？」

「えっと……ないです。」

僕がそう答えると薫さんは有機卵を選んだ。

「確か牛乳はあんまり無かったわよね？」

「あーすいません……覚えてないです。」

薫さんはちよつと考えた後、レジに向かう途中で牛乳もカゴに入れた。

「他に買う物は何があるかな、隼人君？」

「あつちよつと良いですか？」

「大丈夫よ」

僕は冷蔵庫に常備しておいてるお茶のパックが切れているのを思い出した。

僕が売り場の方へ向かうと薫さんは後ろから静かに付いて来た。

「あつたあつた。」

「これでもう大丈夫です。」

「じゃあ行きましょつか？」

「はい。」

会計を終え、帰路に着く。まだ空は青く、明るかった。

車道はいつものように車やオートバイが忙しく走っているのに対

し、歩道の方は逆に僕達二人しかいなかった。

僕ののんびりと、大股な一歩を踏み出すと、薫さんはひょこひょこ
と二歩踏み出して、僕の隣に並ぶ。

柔らかな風が二人の間を抜けていった。その風は僕の頬を撫で、薫
さんの髪を舞わせた。

ぴよんと、薫さんが僕の斜め前に出て、僕の方を向いた。

「ねえ…隼人君…」

そう言ってきた薫さんは昨日の夜の時と同じような表情になっていた。
た。

「もしね…もし、私が…」

薫さんのその先の言葉は僕に届く前に道路で鳴らされたクラクシヨ
ンによってかき消された。

再び二人の間を風が走り抜けた。しかし、その風は先程の柔らかな
風ではなく、薫さんと僕との間にあるはつきりとは分からない何か
を改めて実感させ、僕を切り裂くような風だった。

第25話（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます

いつの間にか25話までやってきて、物語も最終話へ少しずつ進んでいます

ここまで読んでいただいた読者の方々には申し訳ないのですが、今改めて最初からの編集をしている状況です

今、現在は「プロローグ」と「第1話」の編集を終えました
少し内容も変わっているのですちらの方もぜひ宜しくお願いします
それ以降の話も少しずつ編集を行っていき、自分自身の満足のいく『夏の薰り』を完成させたいと思います

今回はこのくらいで…
でわ、失礼します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2554b/>

夏の薫り

2010年12月14日15時02分発行